

だ。無面目にも程があらあ。うぬが土百姓の分在で、利いた風な御託を並べやがる。」
 これにや皆驚いたのに達え無え。實は梯子を下りかけたおれも、あんまりあの野郎の權幕が御大さうなものだから、又中段に足を止めて、もう少し下の成行きを眺めてゐる氣になつたのよ。まして人の好ささうな番頭なんぞは、算盤まで持ち出したのも忘れたやうに、呆れたあの野郎を見つめやがつた。が、氣が強えのは馬子半天での、こいつだけはまだ髭を撫でながら、何處を風が吹くと云ふ面で、

「何が胡麻の蠅がえらかんべい。三年前の大夕立に雷獸様を手捕りにした、横山宿の勘太とはおらが事だ。おらが身もんでえを一つすりや、うぬがやうな胡麻の蠅は、踏み殺されると云ふ事を知ん無えか。」

と嵩にかかつて嚇したが、胡麻の蠅の奴はせせら笑つて、

「へん、こけが六十六部に立山の話でも聞きやしめえし、頭からおどかしを食つてたまるものかえ。これやい、眠む氣さましにや勿體無えが、おれの素性を洗つてやるから、耳の穴を

搔つぽじつて聞きやがれ。」

と聲色にしちや語呂の悪い、啖呵を切り出した所は豪勢だがの、面を見りや寒いと見えて、水つ漬が鼻の下に光つてゐる。おまけにおれのなぐつた所が、小鬚の禿から頭へかけて、まるで面が歪んだやうに、脹れ上つてゐようと云ふものだ。が、それでも田舎者にや、あの野郎のぼんぼん云ふ事が、ちつとは効き目があつたのだらう。あいつが乙に反り身になつて、餓鬼の時から悪事を覺えた行き立てを饒舌つてゐる内にや、雷獸を手捕りにしたとか云ふ、髭のちぢむせえ馬子半天も、追々あの胡麻の蠅を胴突かなくなつて來たちや無えか。それを見るとあの野郎め、愈しやくんだ頭を振りの、三人の奴らをねめまはして、

「へん、このごつぼう人めら、手前たちを怖はがるやうな、よいよいだとも思やがつたか。いんにやさ。唯の胡麻蠅だと思ふと、相手が違ふぞ。手前たちも覺えてゐるだらうが、去年の秋の嵐の晩に、この宿の庄屋へ忍びこみの、有り金を残らず搔つ搔つたのは、誰でも無えこのおれだ。」

「うぬが、あの庄屋様へ、——」
 かう云つたのは、番頭ばかりぢや無え。火吹竹を持つた若え者も、さすがに肝をつぶしたと見えて、思はず大きな聲を出しながら、二足三足後へ下りやがった。
 「さうよ。そんな仕事に驚くやうぢや、手前たちはまだ甘えものだ。かう、よく聞けよ。ついでの中も小佛峠で、金飛脚が二人殺されたのは、誰の仕業だと思やがる。」
 あの野郎は水つ湧をすゝりこんぢや、やれ府中で土藏を破つたの、やれ日野宿でつけ火をしたの、やれ厚木街道の山の中で巡禮の女をなぐさんだの、だんだん途方も無え悪事を饒舌り立てたが、妙な事にやそれにつれて、番頭始め二人の野郎が、何時の間にかあの木念人へ慇懃になつて來やがった。中でも圖體の大きな馬子半天が、莫迦力のありさうな腕を組んで、まじまじあの野郎の面を眺めながら、
 「お前さんと云ふ人は、何たる又悪黨だんべい。」
 と唸るやうな聲を出した時にや、おれは可笑しさがこみ上げての、あぶなく吹き出す所だ

つた。ましてあの胡麻の蠅が、もう酔もさめたのだらう、如何にも寒さうな顔色で、齒の根も合は無え程ふるへながら、口先ばかりや勢よく、
 「何と、ちつとは性根がついたか。だがおれの官祿は、まだまだそんな事ぢや無え。今度江戸をすらかつたのは、臍線金が欲しいばかりに二人と無え御袋を、おれの手にかけて絞め殺した、その化の皮が剥けたからよ。」
 と大きな見得を切つた時にや、三人ともあつと息を引いての、千兩役者でも出て來はしめえし、小鬢から脹れ上つたあいつの面を、難有さうに見つめやがった。おれはあんまり莫迦らしいから、もう見てゐるがものは無えと思つて、二三段梯子を下りかけたが、その途端に番頭の薬罐頭め、何と思やがったか横手を打つて、
 「や、讀めたぞ。讀めたぞ。あの鼠小僧と云ふのは、さてはおぬしの渾名だな。」
 と頓狂な聲を出しやがったから、おれはふと又氣が變つて、あいつが何とぬかしやがるか、それが聞きたさにもう一度、うすつ暗え梯子の中段へ足を止めたと思ひねえ。するとあの胡

麻の蠅め、じろりと番頭を睨みながら、
 「圖星を指されちや仕方が無え。如何にも江戸で噂の高え、鼠小僧とはおれの事だ。」
 と横柄にせせら笑やがつた。が、さう云ふか云は無え内に、胴震ひを一つしたと思ふと、
 二つ三つ續けさまに色氣の無え噓をしやがつたから、折角の睨みも臺無しよ。それでも三人
 の野郎たちは、勝角力の名乗りでも聞きやしめえし、あの重吉の間拔野郎を煽ぎ立て無えば
 かりにして、

「おらもさうだらうと思つてゐた。三年前の大夕立に雷獸様を手捕りにした、横山宿の勘太
 と云つちや、泣く兒も黙るおらだんべい。それをおらの前へ出て、びくともする容子が見え
 無えだ。」

「違え無え。さう云やどこか眼の中に、すすどい所があるやうだ。」

「ほんによ、だからおれは始から、何でもこの人は一つはしの大泥坊になると云つてゐたわ
 な。ほんによ。今夜は弘法にも筆の誤り、上手の手からも水が漏るす。漏つたが、これが漏

ら無えで見ねえ。二階中の客は裸にされるぜ。」

と繩こそ解かうとはし無えけれど、口々にちやほやしやがるのよ。すると又あの胡麻の蠅
 め、大方威張る事ぢや無え。

「かう、番頭さん、鼠小僧の御宿をしたのは、御前の家の旦那が好いのだ。さう云ふお
 れの口を干しちや、旅籠屋冥利が盡きるだらうぜ。柵で好いから五合ばかり、酒をつけてく
 んねえな。」

かう云ふ野郎も圖々しいが、それを又正直に聞いてやる番頭も間抜けぢや無えか。おれは
 八間の明りの下で、薬籠頭の番頭が、あの飲んだくれの胡麻の蠅に、柵の酒を飲ませてゐる
 のを見たら、何もこの山甚の奉公人ばかりとは限ら無え、世間の奴等の莫迦々々しさが、可
 笑しくつて、可笑しくつて、こてえられ無かつた。何故と云ひねえ。同じ悪黨とは云ひなが
 ら、押込みよりや搔拂ひ、火つけよりや巾着切が、まだしも罪は輕いぢや無えか。それなら
 世間もそのやうに、大盗つ人よりや、小盗つ人に憐みをかけてくれさうなものだ。所が人は

さうぢや無え。三下野郎にやむごくつても、金箔つきの悪黨にや向うから頭を下げやがる。鼠小僧と云や酒も飲ますが、唯の胡麻の蠅と云や張り倒すのだ。思やおれも盗つ人だつたら、小盗つ人にやなりたく無え。——とまあ、おれは考へたが、さて何時までも便々と、こんな茶番も見ちやゐられ無えから、わざと音をさせて梯子を下りの、上り口へ荷物を抛り出して、

「おい、番頭さん、私は早立ちと出かけるから、ちよいと勘定をしておくんなせえ。」

と聲をかけると、いや、番頭の薬罐頭め、てれまい事か、慌てて柵を馬子半天に渡しなが

ら、何度も小鬘へ手をやつて、

「これは又御早い御立ちで——え、何とぞ御腹立ちになりやせんやうに——又先程は、ええ、手前どもにもわざわざ御心づけを頂きました——尤も好い鹽梅に雪も晴れたやうですが——」

などと譯のわからぬ事を並べやがるから、おれは可笑しさも可笑しくなつて

「今下りしなに小耳へ挟んだが、この胡麻の蠅は、評判の鼠小僧とか云ふ野郎ださうだの。」

「へい、さやうださうで、——おい、早く御草鞋を持つて來さつし。御笠に御合羽は此處にありと——どうも大した盗つ人ださうでげすな。——へい、唯今御勘定を致しやす。」

番頭のやつはてれ隠しに、若え者を叱りながら、そこそこ帳場の格子の中へ這入ると、仔細らしく脚へ筆で算盤をばちばちやり出しやがった。おれはその間に草鞋をはいて、さて一服吸ひつけたが、見りやあの胡麻の蠅は、もう御神酒がまはつたと見えて、小鬘の禿まで赤くしながら、さすがにちつとは恥しいのか、なるべくおれの方を見無えやうに、側眼ばかり使つてゐやがる。その見すばらしい容子を見ると、おれは今更のやうにあの野郎が可哀さうにもなつて來たから、

「おい、越後屋さん。いやさ、重吉さん。つまら無え冗談は云は無えものだ。御前が鼠小僧だなどと云ふと、人の好い田舎者は本當にするぜ。それぢや割が悪からうが。」

と親切づくに云つてやりや、あの阿呆の合天井め、まだ芝居がし足り無えのか、

「何だと。おれが鼠小僧ぢや無え？ 飛んだ御前は物知りだの。かう、旦那々と立ててゐ

りや——」

「これさ。そんな啖呵が切りたけりや、此處にゐる馬子や若衆が、丁度御前にや好い相手だ。だがそれもさつきからぢや、もう大抵切り飽きたらう。第一御前が紛れも無え日本一の大泥坊なら、何も好き好んでべらべらと、爲にもなら無え舊惡を並べ立てる筈が無えわな。これさ、まあ黙つて聞きねえと云ふ事に。そりや御前が何でも彼でも、鼠小僧だと剛情を張りや、役人始め眞實御前が鼠小僧だと思ふかも知れ無え。が、その時にや輕くて獄門、重くて磔は逃れ無えぜ。それでも御前は鼠小僧か、——と云はれたら、どうする氣だ。」

とかう一本突つこむと、あの意氣地なしめ、見る見る内に唇の色まで變へやがつて、

「へい、何とも申し譯はござりやせん。實は鼠小僧でも何でも無え、唯の胡麻の蠅でござりやす。」

「さうだらう。さうなくつちや、なら無え筈だ。だが火つけや押込みまでさんさんしたと云ふからにや、御前も好い悪黨だ。どうせ笠の臺は飛ぶだらうぜ。」

と框で煙管をはたきながら、大眞面目におれがひやかすと、あいつは酔もさめたと見えて、又水つ漬をすゝりこみの、泣かねえばかりの聲を出して、

「何、あれもみんな嘘でござりやす。私は旦那に申し上げた通り、越後屋重吉と云ふ小間物渡世で、年にきつと一二度はこの街道を上下しやすから、善かれ悪しかれいろいろな噂を知つて居りやすので、つい口から出まかせに、何でも彼でもぼんぼんと——」

「おい、おい、御前は今胡麻の蠅だと云つたぢや無えか。胡麻の蠅が小間物を賣るとは、御入國以來聞か無え事だの。」

「いえ、人様の物に手をかけたのは、今夜がまだ始めてでござりやす。この秋女房に逃げられやして、それから引き續き不手まはりな事ばかり多うござりやしたから、貧すりや鈍すると申す通り、ふとした一時の出来心から、飛んだ失禮な眞似を致しやした。」

おれはいくらとんちきでも、兎に角胡麻の蠅だとは思つてゐたから、かう云ふ話を聞かされた時にや、煙管へ煙草をつめかけた儘、呆れて物も云へなかつた。が、おれは呆れただけ

だつたが、馬子半天と若え者とは、腹を立てたの立て無えのぢやねえ。おれが止めようと思ふ内に、いきなりあの野郎を引きすり倒しの、

「うぬ、よくも人を馬鹿にしやがつたな。」

「その頬桁を張りのめしてくれべい。」

と喚き立てる聲の下から、火吹竹が飛ぶ、榊が降るよ。可哀さうに越後屋重吉は、あんなに横つ面を脹らした上へ、頭まで瘤だらけになりやがつた。……………

三

「話と云ふのはこれつきりよ。」

色の浅黒い、小肥りに肥つた男は、かう一部始終を語り終ると、今まで閑却されてゐた、膳の上の猪口を取り上げた。

向うに見える唐津様の海鼠壁には、何時か入日の光がささなくなつて、堀割に臨んだ一株

の葉柳にも、そろそろ暮色が濃くなつて來た。と思ふと三縁山増上寺の鐘の音が、靜に潮の匂のする欄外の空気を揺りながら、今更のやうに曆の秋を二人の容の胸にしみ渡らせた。風に動いてゐる伊豫簾、御濱御殿の森の鴉の聲、それから二人の間にある盃洗の水の冷たい光——女中の運ぶ燭臺の火が、赤く火先を靡かせながら、梯子段の下から現はれるのも、もう程がないのに相違あるまい。

小辨慶の單衣を着た男は、相手が猪口をとり上げたのを見ると、早速徳利の尻をおさへながら、

「いや、はや、飛んでも無えたわけがあるものだ。日本の盗人の守り本尊、私の最良の鼠小僧を何だと思つてゐやがる。親分なら知ら無え事、私だつたらその野郎をきつと張り倒してゐやしたぜ。」

「何もそれ程に業を煮やす事は無え、あんな間拔な野郎でも、鼠小僧と名乗つたばかりに、大きな面が出来た事を思や、鼠小僧もさぞ本望だらう。」

影

和泉屋の次郎吉

和泉

「だつとつて御前さん、そんな駆け出しの胡麻の蠅に鼠小僧の名をかたられちや——」
割青のある、小柄な男は、まだ云ひ争ひたい氣色を見せたが、色の淺黒い、唐棧の半天を
羽織つた男は、悠々と微笑を含みながら、

「はて、このおれが云ふのだから、本望に違え無えぢや無えか。手前にやまだ明さなかつた
が、三年前に鼠小僧と江戸で噂が高かつたのは——」
と云ふと、猪口を控へた儘、鋭くあたりへ眼をくばつて、
「この和泉屋の次郎吉の事だ。」

横濱。
日華洋行の主人陳彩は、机に背廣の兩肘を凭せて、火の消えた葉巻を啣へた儘、今日も堆い商用書類に、繁忙な眼を曝してゐた。

更紗の窓掛けを垂れた部屋の内には、不相變殘暑の寂寞が、息苦しい位支配してゐた。その寂寞を破るものは、ニスの匂のする戸の向うから、時々此處へ聞えて来る、かすかなタイプライターの音だけであつた。

書類が一片づいた後、陳はふと何か思ひ出したやうに、卓上電話の受話器を耳へ當てた。「私の家へかけてくれ給へ。」

陳の唇を洩れる言葉は、妙に底力のある日本語であつた。

「誰？——婆や？——奥さんにちよいと出て貰つてくれ。——房子かい？——私は今夜東京

へ行くからね、——ああ、向うへ泊つて来る。——歸れないか？——とても汽車に間に合ふまい。——ぢや頼むよ。——何？ 醫者に來て貰つた？——それは神經衰弱に違ひないさ。よろしい。さやうなら。」

陳は受話器を元の位置に戻すと、何故か顔を曇らせながら、肥つた指に鱗寸を摺つて、啣へてゐた葉巻を吸ひ始めた。

……煙草の煙、草花の匂、ナイフやフォークの皿に觸れる音、部屋の隅から湧き上る調子外れのカルメンの音楽、——陳はさう云ふ騒ぎの中に、一杯の麥酒を前にしながら、たつた一人茫然と、卓子に腕をついてゐる。彼の周圍にあるものは、客も、給仕も、煽風機も、何一つ目まぐるしく動いてゐないものはない。が、唯、彼の視線だけは、帳場机の後の女の顔へ、さつきからぢつと注がれてゐる。

女はまだ見た所、二十を越えてもゐないらしい。それが壁へ貼つた鏡を後に、絶えず鉛筆を動かしながら、忙しさにピルを書いてゐる。額の捲き毛、かすかな頬紅、それから地味

な青磁色の半襟。――

陳は麥酒を飲み干すと、徐に大きな體を起して、帳場机の前へ歩み寄つた。

「陳さん。何時私に指環を買つて下すつて？」

女はかう云ふ間にも、依然として鉛筆を動かしてゐる。

「その指環がなくなつたら。」

陳は小錢を探りながら、女の指へ頭を向けた。其處には既に二年前から、延べの金の兩端を抱かせた、約婚の指環が嵌つてゐる。

「ぢや今夜買つて頂戴。」

女は咄嗟に指環を抜くと、ピルと一しよに彼の前へ投げた。

「これは護身用の指環なのよ。」

カツフェの外のアスファルトには、涼しい夏の夜風が流れてゐる。陳は人通りに交りながら、何度も町の空の星を仰いで見た。その星も皆今夜だけは、……

誰かの戸を叩く音が、一年後の現實へ陳彩の心を喚び返した。

「おはひり」

その聲がまだ消えない内に、ニスの匂のする戸がそつと明くと、顔色の蒼白い書記の今西が、無氣味な程靜にはひつて來た。

「手紙が参りました。」

黙つて頷いた陳の顔には、その上今西に一言も、口を開かせない不機嫌さがあつた。今西は冷かに目禮すると、一通の封書を残した儘、又前のやうに音もなく、戸の向うの部屋へ歸つて行つた。

戸が今西の後にしまつた後、陳は灰皿に葉巻を捨てて、机の上の封書を取上げた。それは白い西洋封筒に、タイプライターで宛名を打つた、格別普通の商用書簡と、變る所のない手紙であつた。しかしその手紙を手にすると同時に、陳の顔には云ひやうのない嫌惡の情が浮んで來た。

「又か。」

陳は太い眉を擧めながら、忌々しさうに舌打ちをした。が、それにも關らず、靴の踵を机の縁へ當てると、殆ど輪轉椅子の上に仰向けになつて、紙切小刀も使はずに封を切つた。

「拜啓、貴下の夫人が貞操を守られざるは、再三御忠告……貴下が今日に至るまで、何等斷乎たる處置に出でられざるは……されば夫人は舊日の情夫と共に、日夜……日本人にして且珈琲店の給仕女たりし房子夫人が、……支那人たる貴下の爲に、萬斛の同情無き能はず候。……今後もし夫人を離婚せられずんば、……貴下は萬人の嗤笑する所となるも……微衷不惡御推察……敬白。貴下の忠實なる友より。」

手紙は力なく陳の手から落ちた。

……陳は卓子に倚りかかりながら、レニスの窓掛けを洩れる夕明りに、女持ちの金時計を眺めてゐる。が、蓋の裏に彫つた文字は、房子のイニシアルではないらしい。

「これは？」

新婚後まだ何日も経たない房子は、西洋算笥の前に佇んだ儘、卓子越しに夫へ笑顔を送つた。

「田中さんが下すつたの。御存知ぢやなくつて？ 倉庫會社の——」

卓子の上にはその次に、指環の箱が二つ出て來た。白天鷲絨の蓋を明けると、一つには眞珠の、他の一つには土耳其玉の指環がはひつてゐる。

「久米さんに野村さん。」

今度は珊瑚珠の根懸けが出た。

「古風だわね。久保田さんに頂いたのよ。」

その後から——何が出て來ても知らないやうに、陳は唯ちつと妻の顔を見ながら、考へ深さうにこんな事を云つた。

「これは皆お前の戦利品だね。大事にしなくつちや濟まないよ。」

すると房子は夕明りの中に、もう一度あでやかに笑つて見せた。

「ですからあなたの戦利品もね。」

その時は彼も嬉しかった。しかし今は……

陳は身ぶるひを一つすると、机にかけてゐた兩足を下した。それは卓上電話のベルが、突然彼の耳を驚かしたからであつた。

「私——よろしい。——繋いでくれ給へ。」

彼は電話に向ひながら、苛立たしさに額の汗を拭つた。

「誰?——里見探偵事務所はわかつてゐる。事務所の誰?——吉井君?——よろしい。報告は?——何が来てゐた?——醫者?——それから?——さうかも知れない。——ぢや停車場へ来てゐてくれ給へ。——いや、終列車にはきつと歸るから。——間違はないやうに。さやうなら。」

受話器を置いた陳彩は、まるで放心したやうに、少時は黙然と坐つてゐた。が、やがて置き時計の針を見ると、半ば機械的にベルの鈕を押した。

書記の今西はその響に應じて、心もち明けた戸の後から、瘦せた半身をさし延ばした。
「今西君。鄭君にさう云つてくれ給へ。今夜はどうか私の代りに、東京へ御出でを願ひますと。」

陳の聲は何時の間にか、力のある調子を失つてゐた。今西はしかし例の通り、冷然と目禮を送つた儘、すぐに戸の向うへ隠れてしまつた。

その内に更紗の窓掛けへ、おひおひ當つて來た薄曇りの西日が、この部屋の中の光線に、どんよりした赤味を加へ始めた。と同時に大きな蠅が一匹、何處から此處へ紛れこんだか、鈍い羽音を立てながら、ぼんやり頬杖をついた陳のまはりに、不規則な圓を描き始めた。……

陳彩の家の客間にも、レエスの窓掛けを垂れた窓の内には、晩夏の日の暮が近づいて來た。しかし日の光は消えたものの、窓掛けの向うに煙つてゐる、まだ花盛りの夾竹桃は、この涼しさうな部屋の空気に、快い明るさを漂してゐた。

壁際の籐椅子に倚つた房子は、膝の三毛猫をさすりながら、その窓の外に夾竹桃へ、物憂さうな視線を遊ばせてゐた。

「檀那樣は今晚も御歸りにならないのでございますか？」

これはその側の卓子の上に、紅茶の道具を片づけてゐる召使ひの老女の言葉であつた。

「ああ、今夜も亦寂しいわね。」

「せめて奥様が御病氣でないと、心丈夫でございますけれども——」

「それでも私の病氣はね、唯神経が疲れてゐるのだつて、今日にも山内先生がさう仰つたわ。二三日よく眠りさへすれば、——あら。」

老女は驚いた眼を主人へ舉げた。すると子供らしい房子の顔には、何故か今までにない恐

欠

欠

幸福な周囲を見れば、どんなに氣味の悪い幻も、——いや、しかし怪しい何物かは、眩しい雷燈の光にも恐れず、寸刻もたゆまない凝視の眼を房子の顔に注いでゐる。彼女は兩手に顔を隠すが早いか、無我無中に叫ぼうとした。が、何故か聲が立たない。その時彼女の心上には、あらゆる經驗を超越した恐怖が、……

房子は一週間以前の記憶から、吐息と一しよに解放された。その拍子に膝の三毛猫は、彼女の膝を飛び下りると、毛並みの美しい背を高くして、快ささうに欠呻をした。

「そんな氣は誰でも致すものでございますよ。爺やなどは何時ぞや御庭の松へ、鉄をかけて居りましたら、まつ晝間空に大勢の子供の笑ひ聲が致したとか、さう申して居りました。それでもあの通り氣が違ふ所か、御用の暇には私へ小言ばかり申して居るぢやございませんか。」

老女は紅茶の盆を擡げながら、子供を慰めるやうにかう云つた。それを聞くと房子の頬には、始めて微笑らしい影がさした。

「それこそ御隣の坊ちゃんがおいたをなすつたのに違ひないわ。そんな事にびつくりするやうぢや、爺やもやつぱり臆病なのね。——あら、おしやべりをしてゐる内に、とうとう日が暮れてしまつた。今夜は旦那様が御歸りにならないから、好いやうなものだけんど、御湯は？ 婆や。」

「もうよろしうございますとも。何ならちよいと私が御加減を見て参りませうか。」

「好いわ。すぐにはいるから。」

房子は漸く氣輕さうに、壁側の簾椅子から身を起した。

「又今夜も御隣の坊ちゃんたちは、花火を御揚げなさるかしら。」

老女が房子の後から、靜に出て行つてしまつた跡には、もう夾竹桃も見えなくなつた、薄暗い空虚の客間が残つた。すると二人に忘れられた、あの小さな三毛猫は、急に何か見つけたやうに、一飛びに戸口へ飛んで行つた。さうしてまるで誰かの足に、體を摺りつけるやうな身ぶりをした。が、部屋に擴がつた暮色の中には、その三毛猫の二つの眼が、無氣味な隣

光を放つ外に、何もゐるやうなけはひは見えなかつた。……………

横濱。

日華洋行の宿直室には、長椅子に寝ころんだ書記の今西が、餘り明くない電燈の下に、新刊の雑誌を擴げてゐた。が、やがて手近の卓子の上へ、その雑誌をばたりと抛ると、大事さうに上衣の隠しから、一枚の寫眞をとり出した。さうしてそれを眺めながら、蒼白い頬に何時までも、幸福らしい微笑を浮べてゐた。

寫眞は陳彩の妻の房子が、桃割れに結つた半身であつた。

鎌倉。

下り終列車の笛が、星月夜の空に上つた時、改札口を出た陳彩は、たつた一人跡に残つて、二つ折の鞆を抱へた儘、寂しい構内を眺めまはした。すると電燈の薄暗い壁側のベンチに坐つてゐた、背の高い背廣の男が一人、太い籐の杖を引きすりながら、のそのそ陳の側へ歩み寄つた。さうして潤達に烏打帽を脱ぐと、聲だけは低く挨拶をした。

「陳さんですか？ 私は吉井です。」

陳は殆無表情に、じろりと相手の顔を眺めた。

「今日は御苦勞でした。」

「先程電話をかけましたが、——」

「その後何もなかつたですか？」

陳の語気には、相手の言葉を弾き除けるやうな力があつた。

「何もあります。奥さんは醫者が歸つてしまふと、日暮までは婆やを相手に、何か話して御出ででした。それから御湯や御食事をすませて、十時頃までは蓄音機を御聞きになつてゐ

たやうです。」

「客は一人も來なかつたですか？」

「ええ、一人も。」

「君が監視をやめたのは？」

「十一時二十分です。」

吉井の返答もてきはきしてゐた。

「その後終列車まで汽車はないですね。」

「ありません。上りも、下りも。」

「いや、難有う。歸つたら里見君に、よろしく云つてくれ給へ。」

陳は麥藁帽の庇へ手をやると、吉井が烏打帽を脱ぐのには眼もかけず、砂利を敷いた構外へ大股に歩み出した。その容子が餘り無遠慮すぎたせぬか、吉井は陳の後姿を見送つたなり、ちよいと兩肩を聳やかさせた。が、すぐ又氣にも止めないやうに、輕快な口笛を鳴らした

がら、停車場前の宿屋の方へ、太い籐の杖を引きすつて行つた。

鎌倉。

一時間の後陳彩は、彼等夫婦の寢室の戸へ、盗賊のやうに耳を當てながら、ちつと容子を窺つてゐる彼自身を發見した。寢室の外の廊下には、息のつまるやうな暗闇が、一面にあたりを封じてゐた。その中に唯一點、かすかな明りが見えるのは、戸の向うの電燈の光が、鍵穴を洩れるそれであつた。

陳は殆ど破裂しさうな心臓の鼓動を抑へながら、びつたり戸へ當てた耳に、全身の注意を集めてゐた。が、寢室の中からは、何の話し聲も聞えなかつた。その沈黙が又陳にとつては、一層堪へ難い呵責であつた。彼は目の前の暗闇の底に、停車場から此處へ來る途中の、思ひがけない出來事が、もう一度はつきり見えるやうな氣がした。

……枝を交した松の下には、しつとり砂に露の下りた、細い路が続いてゐる。大空に澄んだ無数の星も、その松の枝の重なつた此處へは、滅多に光を落して來ない。が、海の近い事は、疎な芒に流れて來る潮風が明かに語つてゐる。陳はさつきからたつた一人、夜と共に強くなつた松脂の匂を嗅ぎながら、かう云ふ寂しい闇の中に、注意深い歩みを運んでゐた。

その内に彼はふと足を止めると、不審さうに行く手を透かして見た。それは彼の家の煉瓦塀が、何歩か先に黒々と、現れて來たからばかりではない、その常春藤に蔽はれた、古風な塀の見えるあたりに、忍びやかな靴の音が、突然聞え出したからである。

が、いくら透して見ても、松や芒の間が深いせゐか、肝腎の姿は見る事が出來ない。唯、咄嗟に感づいたのは、その足音がこちらへ來ずに、向うへ行くらしいと云ふ事である。

「莫迦な、この路を歩く資格は、おればかりにある譯ぢやあるまいし。」

陳はかう心の中に、早くも疑惑を抱き出した彼自身を叱らうとした。が、この路は彼の家の裏門の前へ出る外には、何處へも通じてゐない筈である。して見れば、——と思ふ利那に

陳の耳には、その裏門の戸の開く音が、折から流れて來た潮風と一しよに、かすかながらも傳はつて來た。

「可笑しいぞ。あの裏門には今朝見た時も、錠がかかつてゐた筈だが。」

さう思ふと共に陳彩は、獲物を見つけた獵犬のやうに、油断なくあたりへ氣を配りながら、そつとその裏門の前へ歩み寄つた。が、裏門の戸はしまつてゐる。力一ぱい押し見ても、動きさうな氣色も見えないのは、何時の間にか元の通り、錠が下りてしまつたらしい。陳はその戸に倚りかゝりながら、膝を埋めた芒の中に、少時は茫然と佇んでゐた。

「門が明くやうな音がしたのは、おれの耳の迷だつたかしら。」

が、さつきの足音は、もう何處からも聞えて來ない。常春藤の簇つた塀の上には、火の光もささない彼の家が、ひつそりと星空に聳えてゐる。すると陳の心には、急に悲しさがこみ上げて來た。何がそんなに悲しかつたか、それは彼自身にもはつきりしない。唯其處に佇んだ儘、乏しい蟲の音に聞き入つてゐると、自然と涙が彼の頬へ、冷やかに流れ始めたのである。

る。

「房子。」

陳は殆ど呻くやうに、なつかしい妻の名前を呼んだ。

するとその途端である。高い二階の室の一つには、意外にも眩しい電燈がともつた。

「あの窓は、——あれは、——」

陳は際どい息を呑んで、手近の松の幹を捉へながら、延び上るやうに二階の窓を見上げた。窓は、——二階の寢室の窓は、硝子戸をすつかり明け放つた向うに、明るい室内を覗かせてゐる。さうして其處から流れる光が、塀の内に茂つた松の梢を、ぼんやり暗い空に漂はせてゐる。

しかし不思議はそればかりではない。やがてその二階の窓際には、こちらへ向いたらしい人影が一つ、朧げな輪廓を浮き上らせた。生憎電燈の光が後にあるから、顔かたちは誰だか判然しない。が、兎も角もその姿が、女でない事だけは確である。陳は思はず塀の常春藤を

擱んで、倒れかかる體を支へながら、苦しうに切れ切れた聲を洩らした。

「あの手紙は、——まさか、——房子だけは——」

一瞬間の後陳彩は、安々屏を乗り越えると、庭の松の間をくぐりくぐり、首尾よく二階の眞下にある、客間の窓際へ忍び寄つた。其處には花も葉も露に濡れた、水々しい夾竹桃の一むらぎが、……

陳はまつ暗な外の廊下に、乾いた唇を嚙みながら、一層嫉妬深い聞き耳を立てた。それはこの時戸の向うに、さつき彼が聞いたやうな、用心深い靴の音が、二三度床に響いたからであつた。

足響はすぐに消えてしまつた。が、興奮した陳の神経には、程なく窓をしめる音が、鼓膜を刺すやうに聞えて來た。その後には、——又長い沈黙があつた。

その沈黙は忽ち絞め木のやうに、色を失つた陳の額へ、冷たい脂汗を絞り出した。彼はわなわな震へる手に、戸のノツブを探り當てた。が、戸に錠の下りてゐる事は、すぐにそのノ

ツブが教へてくれた。

すると今度は櫛かピンかが、突然ぱたりと落ちる音が聞えた。しかしそれを拾ひ上げる音は、いくら耳を澄ましてゐても、何故か陳には聞えなかつた。

かう云ふ物音は一つ一つ、文字通り陳の心臓を打つた。陳はその度に身を震はせながら、それでも耳だけは剛情にも、ちつと寢室の戸へ押しつけてゐた。しかし彼の興奮が極度に達してゐる事は、時々彼があたりへ投げる、氣違ひじみた視線にも明かであつた。

苦しい何秒かが過ぎた後、戸の向うからはかすかながら、ため息をつく聲が聞えて來た。と思ふとすぐに寢臺の上へも、誰かが靜に上つたやうであつた。

もしこんな状態が、もう一分續いたなら、陳は戸の前に立ちすくんだ儘、失心してしまつたかも知れなかつた。が、この時戸から洩れる、蜘蛛の糸程の朧げな光が、天啓のやうに彼の眼を捉へた。陳は咄嗟に床へ這ふと、ノツブの下にある鍵穴から、食ひ入るやうな視線を室内へ送つた。

その刹那に陳の眼の前には、永久に呪はしい光景が開けた。……………

横濱。

書記の今西は内隠しへ、房子の寫眞を還してしまふと、靜に長椅子から立ち上つた。さうして例の通り音もなく、まつ暗な次の間へはひつて行つた。

スウキツチを捻る音と共に、次の間はすぐに明るなつた。その部屋の卓上電燈の光は、何時の間に其處へ坐つたか、タイプライターに向つてゐる今西の姿を照し出した。

今西の指は忽ちの内に、目まぐるしい運動を続け出した。と同時にタイプライターは、休まない響を刻みながら、何行かの文字が斷續した一枚の紙を吐き始めた。

「拜啓、貴下の夫人が貞操を守られざるは、この上猶も申上ぐべき必要無き事と存じ候。されど貴下は溺愛の餘り……」

今西の顔はこの瞬間、憎惡そのもののマスクであつた。

鎌倉。

陳の寢室の戸は破れてゐた。が、その外は寢臺も、西洋嚮も、洗面臺も、それから明るい電燈の光も、悉く一瞬間以前と同じであつた。

陳彩は部屋の隅に行んだ儘、寢臺の前に伏し重なつた、二人の姿を眺めてゐた、その一人は房子であつた。——と云ふよりも寧ろさつきまでは、房子だつた「物」であつた。この顔中紫に腫れ上つた「物」は、半ば舌を吐いた儘、薄眼に天井を見つめてゐた。もう一人は陳彩であつた。部屋の隅にゐる陳彩と、寸分も變らない陳彩であつた。これは房子だつた「物」に重なりながら、爪も見えない程相手の喉に、両手の指を埋めてゐた。さうしてその露な乳房の上に、生死もわからない頭を凭せてゐた。

何分かの沈黙が過ぎた後、床の上の陳彩は、まだ苦しうに喘ぎながら、徐に肥つた體を起した。が、やつと體を起したと思ふと、すぐ又側にある椅子の上へ、倒れるやうに腰を下してしまつた。

その時部屋の隅にゐる陳彩は、靜に壁際を離れながら、房子だつた「物」の側に歩み寄つた。さうしてその紫に腫上つた顔へ、限なく悲しうな眼を落した。

椅子の上の陳彩は、彼以外の存在に氣がつくが早い、氣違ひのやうに椅子から立ち上つた。彼の顔には、——血走つた眼の中には、妻まじい殺意が閃いてゐた。が、相手の姿を一見すると、その殺意は見る見る内に、云ひやうのない恐怖に變つて行つた。

「誰だ、お前は？」

彼は椅子の前に立ちすくんだ儘、息のつまりさうな聲を出した。

「さつき松林の中を歩いてゐたのも、——裏門からそつと忍びこんだのも、——この窓際に立つて外を見てゐたのも、——おれの妻を、——房子を——」

彼の言葉は一度途絶えてから、又荒々しい嗚れ聲になつた。

「お前だらう。誰だ、お前は？」

もう一人の陳彩は、しかし何とも答へなかつた。その代りに眼を擧げて、悲しうに相手の陳彩を眺めた。すると椅子の前の陳彩は、この視線に射すくまされたやうに、無氣味な程大きな眼をしながら、だんだん壁際の方へすさり始めた。が、その間も彼の唇は、「誰だ、お前は？」を繰返すやうに、時々聲もなく動いてゐた。

その内にもう一人の陳彩は、房子だつた「物」の側に跪くと、そつとその細い頸へ手を廻した。それから頸に残つてゐる、無残な指の痕に唇を當てた。

明い電燈の光に満ちた、墓室よりも靜な寢室の中には、やがてかすかな泣き聲が、途切れ途切れに聞え出した。見ると此處にゐる二人の陳彩は、壁際に立つた陳彩も、床に跪いた陳彩のやうに、兩手に顔を埋めながら………

東京

突然「影」の映畫が消えた時、私は一人の女と一しよに、或活動寫眞館のボックスの椅子に坐つてゐた。

「今の寫眞はもうすんだのかしら。」

女は憂鬱な眼を私に向けた。それが私には「影」の中の房子の眼を思ひ出させた。

「どの寫眞？」

「今のさ。」影と云ふのだらう。」

女は無言の儘、膝の上のプログラムを私に渡してくれた。が、それには何處を探しても、「影」と云ふ標題は見當らなかつた。

「するとおれは夢を見てゐたのかな。それにしても眠つた覚えのないのは妙ぢやないか。おまけにその「影」と云ふのが妙な寫眞だね。——」

私は手短かに「影」の梗概を話した。

「その寫眞なら、私も見た事があるわ。」

私が話し終つた時、女は寂しい眼の底に微笑の色を動かしながら、殆聞えないやうにかう返事をした。

「お互に「影」なんぞは、氣にしないやうにしませうね。」

秋
山
圖

「——黄大癡と云へば、大癡の秋山圖を御覽になつた事がありますか？」
或秋の夜、甌香閣を訪ねた王石谷は、主人の憚南田と茶を吸りながら、話の次手にこんな問を發した。

「いや、見た事はありません。あなたは御覽になつたのですか？」

大癡老人黄公望は、梅道人や黄鶴山樵と共に、元朝の畫の神手である。憚南田はかう云ひながら、嘗見た沙磧圖や富春卷が、髣髴と眼底に浮ぶやうな氣がした。

「さあ、それが見たと云つて好いか、見ないと云つて好いか、不思議な事になつてゐるのですが、——」

「見たと云つて好いか、見ないと云つて好いか、——」

憚南田は訝しさに、王石谷の顔へ眼をやつた。

「模本でも御覽になつたのですか？」

「いや、模本を見たのでもないのです。兎に角眞蹟は見たのですが、——それも私ばかりではありません。この秋山圖の事に就いては、煙客先生(王時敏)や廉州先生(王鑑)も、それぞれ因縁が御有りなのです。」

王石谷は又茶を吸つた後、考深さうに微笑した。

「御退屈でなければ話しませうか？」

「どうぞ。」

憚南田は銅檠の火を掻き立ててから、殷勤に客を促した。

*

*

*

*

元宰先生(董其昌)が在世中の事です。或年の秋先生は、煙客翁と畫論をしてゐる内に、ふ

と翁に、黄一峯の秋山圖を見たかと尋ねました。翁は御承知の通り畫事の上では、大癡を宗としてゐた人です。ですから大癡の畫と云ふ畫は苟くも人間にある限り、看盡したと云つてもかまひません。が、その秋山圖と云ふ畫ばかりは、終に見た事がないのです。

「いや、見る所か、名を聞いた事もない位です。」

煙客翁はさう答へながら、妙に恥しいやうな氣がしたさうです。

「では機會のあり次第、是非一度は見て御置きなさい。夏山圖や浮嵐圖に比べると、又一段と出色の作です。恐らくは大癡老人の諸本の中でも、白眉ではないかと思ひますよ。」

「そんな傑作ですか？ それは是非見たいものですが、一體誰が持つてゐるのですか？」

「潤州の張氏の家にあるのです。金山寺へでも行つた時に、門を叩いて御覽なさい。私が紹介狀を書いて上げます。」

煙客翁は先生の手簡を貰ふと、すぐに潤州へ出かけて行きました。何しろさう云ふ妙畫を藏してゐる家ですから、其處へ行けば黄一峯の外にも、まだいろいろ歴代の墨妙を見る事が

出来るに違ひない。——かう思つた煙客翁は、もう一刻も西園の書房に、ちつとしてゐる事は出来ないやうな、落着かない氣もちになつてゐたのです。

所が潤州へ来て觀ると、樂みにしてゐた張氏の家と云ふのは、成程構へは廣さうですが、如何にも荒れ果ててゐるのです。塙には蔦が絡んでゐるし、庭には草が茂つてゐる。その中に鶏や家鴨などが、客の來たのを珍しさうに眺めてゐると云ふ始末ですから、さすがの翁もこんな家に、大癡の名畫があるのだらうかと、一時は元宰先生の言葉が疑ひたくなつた位でした。しかしわざわざ尋ねて來ながら、刺も通ぜずに歸るのは、勿論本望ではありません。そこで取次ぎに出て來た小厮に、兎も角も黄一峯の秋山圖が拜見したいと云ふ、遠來の意を傳へた後、思白先生が書いてくれた紹介狀を渡しました。

すると間もなく煙客翁は、廳堂へ案内されました。此處も紫檀の椅子机が、清らかに並べてありながら、冷たい埃の臭ひがする、——やはり荒廢の氣が鋪觀の上に、漂つてゐるとでも云ひさうなのです。しかし幸ひ出て來た主人は、病弱らしい顔はしてゐても、人がらの

悪い人ではありません。いや、寧ろその蒼白い顔や華奢な手の恰好なぞに、貴族らしい品格が見えるやうな人物なのです。翁はこの主人と一通り、初対面の挨拶をすませると、早速名高い黄一峯を見せて頂きたいと云ひ出しました。何でも翁の話では、その名畫がどう云ふ譯か、今の内に急いで見て置かないと、霧のやうに消えてでもしまひさうな、迷信じみた氣もちがしたのでさうです。

主人はすぐに快諾しました。さうしてその廳堂の素壁へ、一幀の畫幅を懸けさせました。「これが御望みの秋山圖です。」

煙客翁はその畫を一目見ると、思はず驚嘆の聲を洩らしました。

畫は青緑の設色です。溪の水が委蛇と流れた處に、村落や小橋が散在してゐる、——その上に起した主峯の腹には、悠々とした秋の雲が、蛤粉の濃淡を重ねてゐます。山は高房山の横點を重ねた、新雨を経たやうな翠黛ですが、それが又硃を點じた、所々の叢林の紅葉と映發してゐる美しさは、殆ど何と形容して好いか、言葉の着けやうさへありません。かう云ふ

と唯華麗な畫のやうですが、布置も雄大を盡してゐれば、筆墨も渾厚を極めてゐる、——云はば爛然とした色彩の中に、空靈澹蕩の古趣が自ら漲つてゐるやうな畫なのです。

煙客翁はまるで放心したやうに、何時までもこの畫に見入つてゐました。が、畫は見てゐれば見てゐる程、益々神妙を加へて行きます。

「如何です？ 御氣に入りましたか？」

主人は微笑を含みながら、斜に翁の顔を眺めました。

「神品です。元宰先生の絶賞は、たとひ及ばない事があつても、過ぎてゐるとは云はれませぬ。實際この圖に比べれば、私が今までに見た諸名本は、悉く下風にある位です。」

煙客翁はかう云ふ間でも、秋山圖から眼を放しませんでした。

「さうですか？ ほんたうにそんな傑作ですか？」

翁は思はず主人の方へ、驚いた眼を轉じました。

「何故又それが御不審なのです？」

「いや、別に不審と云ふ譯ではないのですが、實は、——」
主人は、殆ど處子のやうに、當惑さうな顔を赤めました。が、やつと寂しい微笑を洩すと、怯づ怯づ壁上の名畫を見ながら、かう言葉を續けるのです。

「實はあの畫を眺める度に、私は何だか眼を明いた儘、夢でも見てゐるやうな氣がするので、成程秋山は美しい。しかしその美しさは、私だけに見える美しさではないか？ 私以外の人間には、平凡な畫圖に過ぎないのではないか？——何故かさう云ふ疑ひが、始終私を悩ませるのです。これは私の氣の迷ひか、或はあの畫が世の中にあるには、餘り美し過ぎるからか、どちらが原因だかわかりません。が、兎に角妙な氣がしますから、ついあなたの御賞讃にも、念を押すやうな事になつたのです。」

しかしその時の煙客翁は、かう云ふ主人の辯解にも、格別心は止めなかつたさうです。それは何も秋山圖に見惚れてゐたばかりではありません。翁には主人が徹頭徹尾、鑑識に疎いのを隠したさに、胡亂の言を並べるとしか、受け取れなかつたからなのです。

翁はそれから少時の後、この廢宅同様な張氏の家を辭しました。

が、どうしても忘れられないのは、あの眼も覺めるやうな秋山圖です。實際大癡の法燈を繼いだ煙客翁の身になつて見れば、何を捨ててもあれだけは、手に入れたいと思つたでせう。のみならず翁は蒐集家です。しかし家藏の墨妙の中でも、黄金二十鎰に換へたと云ふ、李營丘の山陰泛雪圖でさへ、秋山圖の神趣に比べると、遜色のあるのを免れません。ですから翁は蒐集家としても、この稀代の黄一峰が欲しくてたまらなくなつたのです。

そこで潤州にゐる間に、翁は人を張氏に遣はして、秋山圖を譲つて貰ひたいと、何度も交渉して見ました。が、張氏はどうしても、翁の相談に應じません。あの顔色の蒼白い主人は、使に立つたもの話によると、「それ程この畫が御氣に入つたのなら、喜んで先生に御貸し申さう。しかし手離す事だけは、御免蒙りたい」と云つたさうです。それが又氣を負つた煙客翁には、多少痛にも障りました。何、今假して貰はなくても、何時かはきつと手に入れて見せる。——翁はさう心に期しながら、とうとう秋山圖を残したなり、潤州を去る事になりま

した。

それから又一年ばかりの後、煙客翁は潤州へ来た次手に、張氏の家を訪れて見ました。すると壁に絡んだ蔦や庭に茂つた草の色は、以前と更に變りません。が、取次ぎの小厮に聞けば、主人は不在だと云ふ事です。翁は主人に會はないにしろ、もう一度あの秋山圖を見せて貰ふやうに頼みました。しかし何度頼んで見ても、小厮は主人の留守を楯に、頑として奥へ通しません。いや、しまひには門を鎖した儘、返事さへ碌にしないのです。そこで翁はやむを得ず、この荒れ果てた家の何處かに、藏してある名畫を想ひながら、惆悵と獨り歸つて來ました。

所がその後元宰先生に會ふと、先生は翁に張氏の家には、大癡の秋山圖があるばかりか、沈石田の雨夜止宿圖や自壽圖のやうな傑作も、残つてゐると云ふ事を告げました。

「前に御話するのを忘れたが、この二つは秋山圖同様、贖苑の奇觀とも云ふべき作事です。もう一度私が手紙を書くから、是非これも見て御置きなさい。」

煙客翁はすぐに張氏の家へ、急の使を立てました。使は元宰先生の手札の外にも、それらの名畫を購ふべき素金を授けられてゐたのです。しかし張氏は前の通り、どうしても黄一峰だけは、手離す事を肯じません。翁は終に秋山圖には意を絶つより外はなくなりました。

*

*

*

*

王石谷はちよいと口を噤んだ。

「これまでは私が煙客先生から、聞かせられた話なのです。」

「では煙客先生だけは、確に秋山圖を見られたのですか？」

憚南田は髯を撫しながら、念を押すやうに王石谷を見た。

「先生は見たと云はれるのです。が、確に見られたのかどうか、それは誰にもわかりません。」

「しかし御話の容子では、——」

「まあ先を御聴き下さい。しまひまで御聴き下されば、又自ら私とは違つた御考が出るかも知れません。」

王石谷は今度は茶も吸らずに、娓娓と話を続け出した。

*

*

*

*

煙客翁が私にこの話を聴かせたのは、始めて秋山圖を見た時から、既に五十年近い星霜を経過した後だつたのです。その時は元宰先生も、とうに物故してゐましたし、張氏の家でも何時の間にか、三度まで代が變つてゐました。ですからあの秋山圖も、今は誰の家に藏されてゐるか、いや、未だ龜玉の毀れもないか、それさへ我々にはわかりません。煙客翁は手にとるやうに、秋山圖の靈妙を話してから、残念さうにかう云つたものです。

「あの黄一峰は公孫大嬢の劍器のやうなものでしたよ。筆墨はあつても、筆墨は見えない。唯何とも云へない神氣が、直ちに心に迫つて來るのです。——丁度龍翔の看はあつても、人

や劍が我々に見えないのと同じ事ですよ。」

それから一月ばかりの後、そろそろ春風が動き出したのを潮に、私は獨り南方へ、旅をする事になりました。そこで翁にその話をするると、

「では丁度好い機會だから、秋山を尋ねて御覽なさい。あれがもう一度世に出れば、畫苑の慶事ですよ」と云ふのです。

私も勿論望む所ですから、早速翁を煩はせて、手紙を一本書いて貰ひました。が、さて遊歴の途に上つて見ると、何かと行く所も多いものですから、容易に潤州の張氏の家を訪れる暇がありません。私は翁の書を袖にしたなり、とうとう子規が啼くやうになるまで、秋山を尋ねずにはしまひました。

その内にふと耳にはひつたのは、貴戚の王氏が秋山圖を手に入れたと云ふ噂です。さう云へば私が遊歴中、煙客翁の書を見せた人には、王氏を知つてゐるものも交つてゐました。王氏はさう云ふ人からでも、あの秋山圖が、張氏の家に藏してある事を知つたのでせう。何で

も坊間の説によれば、張氏の孫は王氏の使を受けると、傳家の彝鼎や法書と共に、すぐさま大癡の秋山圖を獻じに來たと云ふ事です。さうして王氏は喜びの餘り、張氏の孫を上座に招じて、家姫を出したり、音楽を奏したり、盛な饗宴を催した揚句、千金を壽にしたとか云ふ事です。私は殆ど雀躍しました。滄桑五十載を閱した後でも、秋山圖はやはり無事だつたのです。のみならず私も面識がある、王氏の手中に入つたのです。昔は煙客翁がいくら苦心をしても、この圖を再び見る事は、鬼神が悪むのかと思ふ位、悉く失敗に終りました。が、今は王氏の焦慮も待たず、自然とこの圖が我々の前へ、屋樓のやうに現れたのです。これこそ實際天縁が、熟したと云ふ外はありません。私は取る物も取りあへず、金閣にある王氏の第宅へ、秋山を見に出かけて行きました。

今でもはつきり覚えてゐますが、それは王氏の庭の牡丹が、玉欄の外に咲き誇つた、風のない初夏の午過ぎです。私は王氏の顔を見ると、揮もすますかすまさない内に、思はず笑ひ出してしまいました。

「もう秋山圖はこちらの物です。煙客先生もあの圖では、随分苦勞をされたものですが、今度こそは御安心なさるでせう。さう思ふだけでも愉快です。」

王氏も得意満面でした。

「今日は煙客先生や廉州先生も來られる筈です。が、まあ、御出でになつた順に、あなたから見て貰ひませう。」

王氏は早速傍の壁に、あの秋山圖を懸けさせました。水に臨んだ紅葉の村、谷を埋めてゐる白雲の群、それから遠近に側立つた、屏風のやうな數峰の青、——忽ち私の眼の前には、大癡老人が造り出した、天地よりも更に靈妙な小天地が浮び上つたのです。私は胸を躍らせながら、ちつと壁上の畫を眺めました。

この雲煙邱壑は、紛れもない黄一峯です、癡翁を除いては何人も、これ程敏點を加へながら、しかも墨を活かす事は——これ程設色を重くしながら、しかも筆が隠れない事は、出来ないのに違ひありません。しかし——しかしこの秋山圖は、昔一たび煙客翁が張氏の家に見

たと云ふ圖と、確に別な黄一峯です。さうしてその秋山圖よりも、恐らくは下位にある黄一峯です。

私の周囲には王氏を始め、座にの合せた食客たちが、私の顔色を窺つてゐました。ですから私は失望の色が、寸分も顔へ露れないやうに、氣を使ふ必要があつたのです。が、いくら努めて見ても、何處か不服な表情が、我知らず外へ出たのでせう。王氏は少時たつてから、心配さうに私へ聲をかけました。

「どうです？」

私は言下に答へました。

「神品です。成程これでは煙客先生が、驚倒されたのも不思議はありません。」

王氏はやや顔色を直しました。が、それでもまだ眉の間には、幾分か私の賞識に、不満らしい氣色が見えたものです。

其處へ丁度來合せたのは、私に秋山の神趣を説いた、あの煙客先生です。翁は王氏に會釋

をする間も、嬉しさうな微笑を浮べてゐました。

「五十年前に秋山圖を見たのは、荒れ果てた張氏の家でしたが、今日は又かう云ふ富貴の御宅に、再びこの圖とめぐり合ひました。眞に意外な因縁です。」

煙客翁はかう云ひながら、壁上の大癡を仰ぎ見ました。この秋山が昔翁の見た秋山かどうか、それは勿論誰よりも翁自身が明らかに知つてゐる筈です。ですから私も王氏同様、翁がこの圖を眺める容子に、注意深い眼を注いでゐました。すると果然翁の顔も、見る見る曇つたではありませんか。

少時沈黙が続いた後、王氏は愈不安さうに、怯づ怯づ翁へ聲をかけました。

「如何です？ 今も石谷先生は、大層褒めてくれましたが、——」

私は正直な煙客翁が、有體な返事をしはしないかと、内心冷や冷やしてゐました。しかし王氏を失望させるのは、さすがに翁も氣の毒だつたのでせう。翁は秋山を見終ると、叮嚀に王氏へ答へました。

「これが御手にはひつたのは、あなたの御運が好いのです。御家藏の諸寶もこの後は、一段と光彩を添へる事でせう。」

しかし王氏はこの言葉を聞いても、やはり顔の憂色が、益深くなるばかりです。

その時も廉州先生が、遅れ馳せにでも來なかつたなら、我々は更に氣まづい思ひをさせられたに違ひありません。しかし先生は幸ひにも、煙客翁の賞識が溢り勝ちになつた時、快活に一座へ加はりました。

「これが御話の秋山圖ですか？」

先生は無造作な挨拶をしてから、黄一峯の畫に對しました。さうして少時は默然と、口髭ばかり嚙んでゐました。

「煙客先生は五十年前にも、一度この圖を御覽になつたさうです。」

王氏は一層氣づかはしさうに、かう説明を加へました。廉州先生はまだ翁から、一度も秋山の神逸を聞かされた事がなかつたのです。

「どうでせう？ あなたの御鑑裁は。」

先生は歎息を洩らしたぎり、不相變畫を眺めてゐました。

「御遠慮のない所を伺ひたいのですが、——」

王氏は無理に微笑しながら、再び先生を促しました。

「これですか？ これは——」

廉州先生は又口を噤みました。

「これは？」

「これは癡翁第一の名作でせう。——この雲煙の濃淡を御覽なさい。元氣淋漓ぢやありませんか。林木なぞの設色も、當に天造とも稱すべきものです。あすこに遠峯が一つ見えませう。全體の布局があつた爲に、どの位活きてゐるかわかりません。」

今まで黙つてゐた廉州先生は、王氏の方を顧ると、一々畫の佳所を指さしながら、盛に感歎の聲を擧げ始めました。その言葉と共に王氏の顔が、だんだん晴れやかになり出したのは、

申し上げるまでもありますまい。

私はその間に煙客翁と、ひそかに顔を見合せました。

「先生、これがあの秋山圖ですか？」

私が小聲にかう云ふと、煙客翁は頭を振りながら、妙な瞬きを一つしました。

「まるで萬事が夢のやうです。事によるとあの張家の主人は、狐仙か何かだつたかも知れませんが。」

*
*
*
*

「秋山圖の話はこれだけです。」

王石谷は語り終ると、徐に一碗の茶を啜つた。

「成程、不思議な話です。」

憚南田は、さつきから銅檠の煙を眺めてゐた。

「その後王氏も熱心に、いろいろ尋ねて見たさうですが、やはり癡翁の秋山圖と云へば、あれ以外に張氏も知らなかつたさうです。ですから昔煙客先生が見られたと云ふ秋山圖は、今でも何處かに隠れてゐるか、或はそれが先生の記憶の間違ひに過ぎないのか、どちらとも私にはわかりません。まさか先生が張氏の家へ、秋山圖を見に行かれた事が、全體幻でもありませんまいし、——」

「しかし煙客先生の心の中には、その怪しい秋山圖が、はつきり残つてゐるのでせう。それからあなたの心の中にも、——」

「山石の青緑だの紅葉の硃の色だのは、今でもありあり見えるやうです。」

「では秋山圖がないにしても、懐む所はないではありませんか？」

憚王の兩大家は、掌を揃つて一笑した。

ア
グ
ニ
の
神

—

支那の上海の或町です。晝でも薄暗い或家の二階に、人相の悪い印度人の婆さんが一人、商人らしい一人の亞米利加人と何か頻に話し合つてゐました。

「實は今度もお婆さんに、占ひを頼みに來たのだがね、——」

亞米利加人はさう言ひながら、新しい巻煙草へ火をつけました。

「占ひですか？ 占ひは當分見ないことにしましたよ。」

婆さんは嘲るやうに、じろりと相手の顔を見ました。

「この頃は折角見て上げてても、御禮さへ碌にしない人が、多くなつて來ましたからね。」

「そりや勿論御禮をするよ。」

亞米利加人は借しげもなく、三百弗の小切手を一枚、婆さんの前へ投げてやりました。

「差當りこれだけ取つて置くさ。もしお婆さんの占ひが當れば、その時は別に御禮をするか

ら、——」

婆さんは三百弗の小切手を見ると、急に愛想がよくなりました。

「こんなに澤山頂いては、反つて御氣の毒ですね。——さうして一體又あなたは、何を占つてくれるとおつしやるんです？」

「私が見て貰ひたいのは、——」

亞米利加人は煙草を啣へたなり、狡猾さうな微笑を浮べました。

「一體日米戦争はいつあるかといふことなんだ。それさへちやんとわかつてゐれば我々商人は忽ちの内に、大金儲けが出来るからね。」

「ちや明日いらつしやい。それまでに占つて置いて上げますから。」

「さうか。ちや間違ひのないやうに、——」

印度人の婆さんは、得意さうに胸を反らせました。

「私の占ひは五十年來、一度も外れたことはないのですよ。何しろ私のはアグニの神が、御

自身御告げをなさるのですからね。」

亞米利加人が歸つてしまふと、婆さんは次の間の戸口へ行つて、

「惠蓮。惠蓮。」と呼び立てました。

その聲に應じて出て来たのは、美しい支那人の女の子です。が、何か苦勞でもあるのか、この女の子の下ぶくれの頬は、まるで蠟のやうな色をしてゐました。

「何を愚圖々々してゐるんだえ？ ほんたうにお前位、づうづうしい女はありやしないよ。きつと又臺所で居睡りか何かしてゐたんだらう？」

惠蓮はいくら叱られても、ぢつと俯向いた儘黙つてゐました。

「よく御聞きよ。今夜は久しぶりにアグニの神へ、御伺ひを立てるんだからね、そのつもりでゐるんだよ。」

女の子はまつ黒な婆さんの顔へ、悲しさうな眼を挙げました。

「今夜ですか？」

「今夜の十二時。好いかえ？ 忘れちやいけないよ。」

印度人の婆さんは、脅すやうに指を挙げました。

「又お前がこの間のやうに、私に世話ばかり焼かせると、今度こそお前の命はないよ。お前なんぞは殺さうと思へば、鶴つ仔の頸を絞めるより——」

かう言ひかけた婆さんは、急に顔をしかめました。ふと相手に氣がついて見ると、惠蓮はいつか窓側に行つて、丁度明いてゐた硝子窓から、寂しい往來を眺めてゐるのです。

「何を見てゐるんだえ？」

惠蓮は愈色を失つて、もう一度婆さんの顔を見上げました。

「よし、よし、さう私を莫迦にするんなら、まだお前は痛い目に會ひ足りないだらう。」
婆さんは眼を怒らせながら、そこにあつた箒をふり上げました。

丁度その途端です。誰か外へ来たと見えて、入口の戸を叩く音が、突然荒々しく聞え始めました。

その日のかれこれ同じ時刻に、この家の外を通りかかった、年の若い一人の日本人があります。それがどう思つたのか、二階の窓から顔を出した支那人の女の子を一目見ると、しばらくは呆氣にとられたやうに、ぼんやり立ちすくんでしまひました。

そこへ又通りかかつたのは、年をとつた支那人の人力車夫です。

「おい。おい。あの二階に誰が住んでゐるか、お前は知つてゐないかね？」

日本人はその人力車夫へ、いきなりかう問ひかけました。支那人は楫棒を握つた儘、高い二階を見上げましたが、「あすこですか？ あすこには、何とかいふ印度人の婆さんが住んでゐます。」と、氣味惡さうに返事をする、匆々行きさうにするのです。

「まあ、待つてくれ。さうしてその婆さんは、何を商賣にしてゐるんだ？」

「占ひ者です。が、この近所の噂ちや、何でも魔法さへ使ふさうです。まあ、命が大事だつ

たら、あの婆さんの所なぞへは行かない方が好いやうですよ。」

支那人の車夫が行つてしまつてから、日本人は腕を組んで、何か考へてゐるやうでしたが、やがて決心でもつたのか、さつさとその家の中へはひつて行きました。すると突然聞えて來たのは、婆さんの罵る聲に交つた、支那人の女の子の泣き聲です。日本人はその聲を聞くが早い、一股に二三段づつ、薄暗い梯子を駆け上りました。さうして婆さんの部屋の戸を力一ぱい叩き出しました。

戸は直ぐに開きました。が、日本人が中へはひつて見ると、そこには印度人の婆さんがたつた一人立つてゐるばかり、もう支那人の女の子は、次の間へでも隠れたのか、影も形も見當りません。

「何か御用ですか？」

婆さんはさも疑はしさうに、じろじろ相手の顔を見ました。

「お前さんは占ひ者だらう？」

日本人は腕を組んだ儘、婆さんの顔を睨み返しました。

「さうです。」

「ちや私の用などは、聞かなくてもわかつてゐるぢやないか？ 私も一つお前さんの占ひを見て貰ひにやつて来たんだ。」

「何を見て上げるんですえ？」

婆さんは益々疑はしさうに、日本人の容子を窺つてゐました。

「私の主人の御嬢さんが、去年の春行方知れずになつた。それを一つ見て貰ひたいんだが、

——

日本人は一句一句、力を入れて言ふのです。

「私の主人は香港の日本領事だ。御嬢さんの名は妙子さんとおつしやる。私は遠藤といふ書生だが——どうだね？ その御嬢さんはどこにいらつしやる。」

遠藤はかう言ひながら、上衣の隠しに手を入れると、一挺のピストルを引き出しました。

「この近所にいらつしやりはしないか？ 香港の警察署の調べた所ちや、御嬢さんを攫つたのは、印度人らしいといふことだつたが、——隠し立てをするを爲にならんぞ。」

しかし印度人の婆さんは、少しも怖がる氣色が見えませぬ。見えない所か、肩には、反つて人を莫迦にしたやうな微笑さへ浮べてゐるのです。

「お前さんは何を言ふんだえ？ 私はそんな御嬢さんなんぞは、顔を見たこともありやしなすよ。」

「嘘をつけ。今その窓から外を見てゐたのは、確かに御嬢さんの妙子さんだ。」

遠藤は片手にピストルを握つた儘、片手に次の間の戸口を指さしました。

「それでもまだ剛情を張るんなら、あすこにゐる支那人をつれて来い。」

「あれは私の貰ひ子だよ。」

婆さんはやはり嘲るやうに、にやにや獨り笑つてゐるのです。

「貰ひ子か貰ひ子でないか、一目見りやわかることだ。貴様がつれて来なければ、おれがあ

すこへ行つて見る。」

遠藤が次の間へ踏みこまうとすると、咄嗟に印度人の婆さんは、その戸口に立ち塞がりました。

「ここは私の家だよ。見ず知らずのお前さんなんぞに、奥へはひられてたまるものか。」

「退け。退かないと射殺すぞ。」

遠藤はピストルを挙げました。いや、挙げようとしたのです。が、その拍子に婆さんが、鴉の啼くやうな聲を立てたかと思ふと、まるで電氣に打たれたやうに、ピストルは手から落ちてしまひました。これには勇み立つた遠藤も、さすがに膽をひしがれたのでせう、ちよいとの間は不思議さうに、あたりを見廻してゐましたが、忽ち又勇氣をとり直すと、

「魔法使め」と罵りながら、虎のやうに婆さんへ飛びかかりました。

が、婆さんもさるものです。ひらりと身を躲すが早いから、そこにあつた箒をとつて、又掴みかからうとする遠藤の顔へ、床の上の五味を掃きかけました。すると、その五味が皆火花

になつて、眼といはず、口といはず、ばらばらと遠藤の顔へ焼きつくのです。

遠藤はたうとうたまり兼ねて、火花の旋風に追はれながら、轉げるやうに外へ逃げ出しました。

三

その夜の十二時に近い時分、遠藤は獨り婆さんの家の前にたたずみながら、二階の硝子窓に映る火影を口惜しさうに見つめてゐました。

「折角御嬢さんの在りかをつきとめながら、とり戻すことが出来ないのは残念だな。一そ警察へ訴へようか？ いや、いや、支那の警察が手ぬるいことは、香港でもう懲り懲りしてゐる、萬一今度も逃げられたら、又探すのが一苦勞だ。といつてあの魔法使には、ピストルさへ役に立たないし、——」

遠藤がそんなことを考へてゐると、突然高い二階の窓から、ひらひら落ちて來た紙切れが

あります。

「おや、紙切れが落ちて来たが、——もしや御嬢さんの手紙ぢやないか？」

かう呟いた遠藤は、その紙切れを、拾ひ上げながらそつと隠した懐中電燈を出して、まん圓な光に照らして見ました。すると果して紙切れの上には、妙子が書いたのに違ひない、消えさうな鉛筆の跡があります。

「遠藤サン。コノ家ノオ婆サンハ、恐シイ魔法使デス。時々眞夜中ニ私ノ體ヘ、「アグニ」トイフ印度ノ神ヲ乗リ移ラセマス。私ハソノ神ガ乗リ移ツテキル間中、死ンダヤウニナツテキルノデス。デスカラドンナ事ガ起ルカ知リマセンガ、何デモオ婆サンノ話デハ、「アグニ」ノ神ガ私ノ口ヲ借リテ、イロイロ豫言ヲスルノダサウデス。今夜モ十二時ニハオ婆サンガ又「アグニ」ノ神ヲ乗リ移ラセマス。イツモダト私ハ知ラズ知ラズ、氣ガ遠クナツテシマフノデスガ、今夜ハサウナラナイ内ニ、ワザト魔法ニカカツタ眞似ヲシマス。サウシテ私ヲオ父様

ノ所ヘ返サナイト「アグニ」ノ神ガオ婆サンノ命ヲト言ツテヤリマス。オ婆サンハ何ヨリモ「アグニ」ノ神ガ怖イノデスカラ、ソレヲ聞ケベキツト私ヲ返スダラウト思ヒマス。ドウカ明日ノ朝モウ一度、オ婆サンノ所ヘ來テ下サイ。コノ計略ノ外ニハオ婆サンノ手カラ、逃ゲ出スミチハアリマセン。サウナラ。」

遠藤は手紙を読み終ると、懐中時計を出して見ました。時計は十二時五分前です。

「もうそろそろ時刻になるな、相手はあんな魔法使だし、御嬢さんはまだ子供だから、餘程運が好くないと、——」

遠藤の言葉が終らない内に、もう魔法が始まるのでせう。今まで明るかつた二階の窓は、急にまつ暗になつてしまひました。と同時に不思議な香の匂が、町の敷石にも滲みる程、どこからか静に漂つて來ました。

四

その時あの印度人の婆さんは、ランプを消した二階の部屋の机に、魔法の書物を擴げながら、頻に呪文を唱へてゐました。書物は香爐の火の光に、暗い中でも文字だけは、ぼんやり浮き上らせてゐるのです。

婆さんの前には心配さうな惠蓮が、——いや、支那服を着せられた妙子が、ちつと椅子に坐つてゐました。さつき窓から落した手紙は、無事に遠藤さんの手へはひつたであらうか？あの時往來にゐた人影は、確に遠藤さんだと思つたが、もしや人違ひではなかつたであらうか？——さう思ふと妙子は、ゐても立つてもゐられないやうな氣がして來ます。しかし今うつかりそんな氣ぶりが、婆さんの眼にでも止まつたが最後、この恐しい魔法使ひの家から、逃げ出さうといふ計略は、すぐに見破られてしまふでせう。ですから妙子は一生懸命に、震へる両手を組み合せながら、かねてたのんで置いた通り、アグニの神が乗り移つたやうに、

見せかける時の近づくのを今か今かと待つてゐました。

婆さんは呪文を唱へてしまふと、今度は妙子をめぐりながら、いろいろな手ぶりをし始めました。或時は前へ立つた儘、両手を左右に擧げて見せたり、又或時は後へ來て、まるで眼かくしでもするやうに、そつと妙子の額の上へ手をかさしたりするのです。もしこの時部屋の外から、誰か婆さんの容子を見てゐたとすれば、それはきつと大きな蝙蝠か何か、蒼白い香爐の火の光の中に、飛びまはつてでもゐるやうに見えたでせう。

その内に妙子はいつものやうに、だんだん睡氣がきざして來ました。が、こゝで睡つてしまつては、折角の計略にかけることも、出來なくなつてしまふ道理です。さうしてこれが出來なければ、勿論二度とお父さんの所へも、歸れなくなるのに違ひありません。

「日本の神々様、どうか私が睡らないやうに、御守りなすつて下さいまし。その代り私はもう一度、たとひ一目でもお父さんの御顔を見ることが出來たなら、すぐに死んでもよろしうございます。日本の神々様、どうかお婆さんを欺せるやうに、御力を御貸し下さいまし。」

妙子は何度も心の中に、熱心に祈りを続けました。しかし睡気はおひおひと、強くなつて来るばかりです。と同時に妙子の耳には、丁度銅鑼でも鳴らすやうな、得體の知れない音楽の聲が、かすかに傳はり始めました。これはいつでもアグニの神が、空から降りて来る時に、きつと聞える聲なのです。

もうかうなつてはいくら我慢しても、睡らずにゐることは出来ません。現に目の前の香爐の火や、印度人の婆さんの姿でさへ、氣味の悪い夢が薄れるやうに、見る見る消え失せてしまふのです。

「アグニの神、アグニの神、どうか私の申すことを御聞き入れ下さいまし。」

やがてあの魔法使ひが、床の上にひれ伏した儘、嘎れた聲を擧げた時には、妙子は椅子に坐りながら、殆ど生死も知らないやうに、いつかもうぐつすり寝入つてゐました。

五

妙子は勿論婆さんも、この魔法を使ふ所は、誰の眼にも觸れないと、思つてゐたのに違ひありません。しかし實際は部屋の外に、もう一人戸の鍵穴から、覗いてゐる男があつたのです。それは一體誰でせうか？——言ふまでもない、書生の遠藤です。

遠藤は妙子の手紙を見てから、一時は往來に立つたなり、夜明けを待たうかとも思ひました。が、お嬢さんの身の上を思ふと、どうしてもちつとしてはゐられません。そこでとうとう盗人のやうに、そつと家の中へ忍びこむと、早速この二階の戸口へ来て、さつきから透き見をしてゐたのです。

しかし透き見をすると言つても、何しろ鍵穴を覗くのですから、蒼白い香爐の火の光を浴びた、死人のやうな妙子の顔が、やつと正面に見えるだけです。その外は机も、魔法の書物も、床にひれ伏した婆さんの姿も、まるで遠藤の眼にははひりません。しかし嘎れた婆さんの聲は、手にとるやうにはつきり聞えました。

「アグニの神、アグニの神、どうか私の申すことを御聞き入れ下さいまし。」

婆さんがかう言つたと思ふと、息もしないやうに坐つてゐた妙子は、やはり眼をつぶつた儘、突然口を利き始めました。しかもその聲がどうしても、妙子のやうな少女とは思はれない、荒々しい男の聲なのです。

「いや、おれはお前の願ひなどは聞かない。お前はおれの言ひつけに背いて、いつも悪事ばかり働いて來た。おれはもう今夜限り、お前を見捨てようと思つてゐる。いや、その上に悪事の罰を下してやらうと思つてゐる。」

婆さんは呆氣にとられたのでせう。暫くは何とも答へずに、喘ぐやうな聲ばかり立ててゐました。が、妙子は婆さんに頓着せず、おこそかに話し續けるのです。

「お前は憐れな父親の手から、この女の子を盗んで來た。もし命が惜しかつたら、明日とも言はず今夜の内に、早速この女の子を返すが好い。」

遠藤は鍵穴に眼を當てた儘、婆さんの答を待つてゐました。すると婆さんは驚きでもするかと思ひの外、憎々しい笑ひ聲を洩らしながら、急に妙子の前へ突つ立ちました。

「人を莫迦にするのも、好い加減におし。お前は私を何だと思つてゐるのだえ。私はまだお前に欺される程、筆碌はしてゐない心算だよ。早速お前を父親へ返せ——警察の御役人ぢやあるまいし、アグニの神がそんなことを御言ひつけになつてたまるものか。」

婆さんはどこからとり出したか、眼をつぶつた妙子の顔の先へ、一挺のナイフを突きつけました。

「さあ、正直に白状おし。お前は勿體なくもアグニの神の、聲色を使つてゐるのだらう。」
さつきから容子を窺つてゐても、妙子が實際睡つてゐることは、勿論遠藤にはわかりませ

ん。ですから遠藤はこれを見ると、さては計略が露顯したかと思はず胸を躍らせました。
が、妙子は相變らず目蓋一つ動かさず、嘲笑ふやうに答へるのです。
「お前も死に時が近づいたな。おれの聲がお前には人間の聲に聞えるのか。おれの聲は低くとも、天上に燃える炎の聲だ。それがお前にはわからないのか。わからなければ、勝手にするが好い。おれは唯お前に尋ねるのだ。すぐにこの女の子を送り返すか、それともおれの言

ひつけに背くか——」

婆さんはちよいとためらつたやうです。が、忽ち勇氣をとり直すと、片手にナイフを握りながら、片手に妙子の襟髪を掴んで、するする手もとへ引き寄せました。

「この阿魔め。まだ剛情を張る氣だな。よし、よし、それなら約束通り、一思ひに命をとつてやるぞ。」

婆さんはナイフを振り上げました。もう一分間遅れても、妙子の命はなくなります。遠藤は咄嗟に身を起すと、鏡のかかつた入口の戸を無理無體に明けようとなりました。が、戸は容易に破れません。いくら押しても、叩いても、手の皮が摺り剥けるばかりです。

六

その内に部屋の中からは、誰かのわつと叫ぶ聲が、突然暗やみに響きました。それから人が床の上へ、倒れる音も聞えたやうです。遠藤は殆ど氣違ひのやうに、妙子の名前を呼びか

けながら、全身の力を肩に集めて、何度も入口の戸へぶつかりました。

板の裂ける音、鏡のはね飛ぶ音、——戸はとうとう破れました。しかし肝腎の部屋の中は、まだ香爐に蒼白い火がめらめら燃えてゐるばかり、人氣のないやうにしんとしてゐます。

遠藤はその光を便りに、怯づ怯づあたりを見廻しました。

するとすぐに眼にはひつたのは、やはりちつと椅子にかけた、死人のやうな妙子です。それが何故か遠藤には、頭に毫光でもかかつてゐるやうに、嚴かな感じを起させました。

「御嬢さん、御嬢さん。」

遠藤は椅子の側へ行くと、妙子の耳もとへ口をつけて、一生懸命に叫び立てました。が、妙子は眼をつぶつたなり、何とも口を開きません。

「御嬢さん。しつかりおしなさい。遠藤です。」

妙子はやつと夢がさめたやうに、かすかな眼を開きました。

「遠藤さん？」

「さうです。遠藤です。もう大丈夫ですから、御安心なさい。さあ、早く逃げませう。」
妙子はまだ夢現のやうに、弱々しい聲を出しました。

「計略は駄目だったわ。つい私が眠ってしまったものだから、——堪忍して頂戴よ。」

「計略が露顯したのは、あなたのせわちやありませんよ。あなたは私と約束した通り、アグニの神の憑つた眞似をやり了せたちやありませんか？——そんなことはどうでも好いことです。さあ、早く御逃げなさい。」

遠藤はもどかしさうに、椅子から妙子を抱き起しました。

「あら、嘘。私は眠ってしまったのですもの。どんなことを言つたか、知りはないわ。」

妙子は遠藤の胸に凭れながら、呟くやうにかう言ひました。

「計略は駄目だったわ。とても私は逃げられなくなつてよ。」

「そんなことがあるものですか。私と一しよにいらつしやい。今度しくじつたら大變です。」

「だつてお婆さんがゐるでせう？」

「お婆さん？」

遠藤はもう一度、部屋の中を見廻しました。机の上にはさつきを通り、魔法の書物が開いてある、——その下へ仰向きに倒れてゐるのは、あの印度人の婆さんです。婆さんは意外にも自分の胸へ、自分のナイフを突き立てた儘、血だまりの中に死んでゐました。

「お婆さんはどうして？」

「死んでゐます。」

妙子は遠藤を見上げながら、美しい眉をひそめました。

「私、ちつとも知らなかつたわ。お婆さんは遠藤さんが——あなたが殺してしまつたの？」

遠藤は婆さんの屍骸から、妙子の顔へ眼をやりました。今夜の計略が失敗したことが、——その爲に婆さんも死んでしまへば、妙子も無事に取り返せたことが、——運命の力の不思議なことが、やつと遠藤にもわかつたのは、この瞬間だったのです。

「私が殺したのちやありません。あの婆さんを殺したのは今夜こゝへ來たアグニの神です。」

女

雌蜘蛛は眞夏の日の光を浴びた儘、紅い庚申薔薇の花の底に、ちつと何か考へてゐた。すると空に翅音がして、忽ち一匹の蜜蜂が、なぐれるやうに薔薇の花へ下りた。蜘蛛は咄嗟に眼を舉げた。ひつそりした眞晝の空氣の中には、まだ蜂の翅音の名残りが、かすかな波動を残してゐた。

雌蜘蛛は何時か音もなく、薔薇の花の底から動き出した。蜂はその時もう花粉にまみれながら、蕊の下にひそんでゐる蜜へ嘴を落してゐた。

残酷な沈黙の數秒が過ぎた。

紅い庚申薔薇の花びらは、やがて蜜に酔つた蜂の後へ、徐に雌蜘蛛の姿を吐いた。と思ふと蜘蛛は猛然と、蜂の首もとへ跳りかかった。蜂は必死に翅を鳴らしながら、無二無三に敵を刺さうとした。花粉はその翅に煽られて、紛々と日の光の中に舞ひ上つた。が、蜘蛛はど

うしても、噛みついた口を離さなかつた。

争闘は短かつた。

蜂は間もなく翅が利かなくなつた。それから脚には麻痺が起つた。最後に長い嘴が痙攣的に二三度空を突いた。それが悲劇の終局であつた。人間の死と變りない、刻薄な悲劇の終局であつた。——一瞬の後、蜂は紅い庚申薔薇の底に、嘴を伸ばした儘横はつてゐた。翅も脚も悉く、香の高い花粉にまぶされながら、……

雌蜘蛛はちつと身ちろぎもせず、靜に蜂の血を吸り始めた。

恥を知らない太陽の光は、再び薔薇に返つて來た眞晝の寂寞を切り開いて、この殺戮と掠奪とに勝ち誘つてゐる蜘蛛の姿を照らした。灰色の繻子に酷似した腹、黒い南京玉を想はせる眼、それから癩を病んだやうな、醜い節々の硬まつた脚、——蜘蛛は殆「惡」それ自身のやうに、何時までも死んだ蜂の上に底氣味悪くのしかかつてゐた。

かう云ふ残酷を極めた悲劇は、何度となくその後繰返された。が、紅い庚申薔薇の花は息

苦しい光と熱との中に、毎日美しく咲き狂つてゐた。——
 その内に雌蜘蛛は或眞晝、ふと何か思ひついたやうに、薔薇の葉と花との隙間をくぐつて、一つの枝の先へ這ひ上つた。先には土いきれに凋んだ苔が、花びらを暑熱に扭られながら、かすかに甘い匂を放つてゐた。雌蜘蛛は其處まで上りつめると、今度はその苔と枝との間に休まない往來を續けだした。と同時にまつ白な、光澤のある無數の絲が、半ばその素枯れた苔をからんで、だんだん枝の先へまつはり出した。

暫くの後、其處には絹を張つたやうな圓錐形の囊が一つ、眩い程もう白々と、眞夏の日の光を照り返してゐた。

蜘蛛は巢が出来上ると、その華奢な囊の底に、無數の卵を産み落した。それから又囊の口へ、厚い絲の敷物を編んで、自分はその上に座を占めながら、更にもう一天井、紗のやうな幕を張り渡した。幕はまるで圓頂閣のやうな、唯一つの窓を残して、この獐猛な灰色の蜘蛛を眞晝の青空から遮断してしまつた。が、蜘蛛は——産後の蜘蛛は、まつ白な廣間のまん中

に、瘦せ衰へた體を横たへた儘、薔薇の花も太陽も蜂の翅音も忘れたやうに、たつた一匹兀兀と、物思ひに沈んでゐるばかりであつた。

何週間かは経過した。

その間に蜘蛛の囊の中では、無數の卵に眠つてゐた、新しい生命が眼を覺ました。それを誰より先に気づいたのは、あの白い廣間のまん中に、食さへ斷つて横はつてゐる、今は老果てた母蜘蛛であつた。蜘蛛の絲は敷物の下に、何時の間にか蠢き出した、新しい生命を感ずると、徐に弱つた脚を運んで、母と子とを隔ててゐる囊の天井を噛み切つた。無數の仔蜘蛛は續々と、其處から廣間へ溢れて來た。と云ふよりは寧ろその敷物自身が、百十の微粒分子になつて、動き出したとも云ふべき位であつた。

仔蜘蛛はすぐに圓頂閣の窓をくぐつて、日の光と風との通つてゐる、庚申薔薇の枝へなだれ出した。彼等の或一團は炎暑を重く支へてゐる薔薇の葉の上にひしめき合つた。又其一團は珍しさうに、幾重にも蜜の匂を抱いた薔薇の花の中へまぐれこんだ。さうして更に又或一

團は、縦横に青空を裂いてゐる薔薇の枝と枝との間へ、早くも眼には見えない程、細い糸を張り始めた。もし彼等に聲があつたら、この白日の庚申薔薇は、梢にかけたヴィオロンが自ら風に歌ふやうに、鳴りどよんだのに違ひなかつた。

しかしその圓頂閣の窓の前には、影の如く瘦せた母蜘蛛が、寂しさうに獨り蹲つてゐた。のみならずそれは何時まで経つても、脚一つ動かす氣色さへなかつた。まつ白な廣間の寂寞と凋んだ薔薇の苔の匂と、——無數の仔蜘蛛を生んだ雌蜘蛛はさう云ふ産所と墓とを兼ねた、紗のやうな幕の天井の下に、天職を果した母親の限りない歡喜を感じながら、何時か死に就いてゐたのであつた。——あの蜂を噛み殺した、殆「悪」それ自身のやうな、眞夏の自然に生きてゐる女は。

奇怪な再會

お蓮が本所の横綱に圍はれたのは、明治二十八年の初冬だつた。
妾宅は御藏橋の川に臨んだ、極手狭な平家だつた。唯庭先から川向うを見ると、今は兩國
停車場になつてゐる御竹倉一帯の藪や林が、時雨勝な空を遮つてゐたから、比較的町中らし
くない、閑静な眺めには乏しくなかつた。が、それだけに又旦那が來ない夜などは寂し過ぎ
る事も度々あつた。

「婆や、あれは何の聲だらう？」

「あれでございますか？ あれは五位驚でございますよ。」

お蓮は眼の悪い傭ひ婆さんとランプの火を守りながら、氣味悪さうにこんな會話を交換す
る事もないではなかつた。

旦那の牧野は三日にあげず、晝間でも役所の歸り途に、陸軍一等主計の軍服を着た、遅し

い姿を運んで來た。勿論日が暮れてから、厩橋向うの本宅を抜けて來る事も稀ではなかつ
た。牧野はもう女房ばかりか、男女二人の子持ちでもあつた。

この頃丸鬚に結つたお蓮は、殆ど宵毎に長火鉢を隔てながら、牧野の酒の相手をした。二
人の間の茶ぶ臺には、大抵からすみや海鼠腸が、小綺麗な皿小鉢を並べてゐた。

さう云ふ時には過去の生活が、兎角お蓮の頭の中に、はつきり浮んで來勝ちだつた。彼女
はあの賑やかな家や朋輩たちの顔を思ひ出すと、遠い他國へ流れて來た彼女自身の便りなさ
が、一層心に沁みるやうな氣がした。それから又以前よりも、益々肥つて來た牧野の體が、
不意に妙な憎惡の念を燃え立たせる事も時々あつた。

牧野は始終愉快さうに、ちびちび杯を嘗めてゐた。さうして何か冗談を云つては、お蓮
の顔を覗きこむと、突然大聲に笑ひ出すのが、この男の酒癖の一つだつた。

「如何ですな。お蓮の方、東京も満更ぢやありませんまい。」

お蓮は牧野にかう云はれても、大抵は微笑を洩らした儘、酒の爛などに氣をつけてゐた。

役所の勤めを抱へてゐた牧野は、滅多に泊つて行かなかつた。枕もとに置いた時計の針が、十二時近くなつたのを見ると、彼はすぐにメリヤスの襯衣へ、太い腕を通し始めた。お蓮は自墮落な立て膝をしたなり、何時も唯ぼんやりと、せはしなさうな牧野の歸り仕度へ、懶い流し眼を送つてゐた。

「おい、羽織をとつてくれ。」

牧野は夜中のランプの光に、脂の浮いた顔を照させながら、もどかしさうな聲を出す事もあつた。

お蓮は彼を送り出すと、殆ど毎夜の事ながら、氣疲れを感じずにはゐられなかつた。同時に又獨りになつた事が、多少は寂しくも思はれるのだつた。

雨が降つても、風が吹いても、川一つ隔てた藪や林は、心細い響を立て易かつた。お蓮は酒臭い夜着の襟に、冷たい頬を埋めながら、ぢつとその響に聞き入つてゐた。かうしてゐる内に彼女の眼には、何時か涙が一ばいに漂つて來る事があつた。しかしふだんは重苦しい眠

が、——それ自身悪夢のやうな眠が、間もなく彼女の心の上へ、昏々と下つて來るのだつた。

二

「どうしたんですよ？ その傷は。」

或靜かな雨降りの夜、お蓮は牧野の酌をしながら、彼の右の頬へ眼をやつた。其處には青い刺痕の中に、大きな蚯蚓眼が出來てゐた。

「これか？ これは鼻に引つ搔れたのさ。」

牧野は冗談かと思ふ程、顔色も聲もけろりとしてゐた。

「まあ、嫌な御新造だ。どうして又そんな事をしたんです？」

「どうしてもかうしてもあるものか。御定りの角をはやしたのさ。おれでさへこの位だから、お前なぞが遇つて見る。忽ち喉笛へ噛みつかれるぜ。まづ早い話が満洲犬さ。」

お蓮はくすくす笑ひ出した。

「笑ひ事ぢやないぜ。此處にある事が知れた日にや、明日にも押しかけて來ないものぢやな
50」

牧野の言葉には思ひの外、眞面目さうな調子も交つてゐた。

「さうしたら、その時の事ですわ。」

「へえ、ひどく又度胸が好いな。」

「度胸が好い譯ぢやないんです。私の國の人間は、——」

お蓮は考へ深さうに、長火鉢の炭火へ眼を落した。

「私の國の人間は、みんな諦めが好いんです。」

「ぢやお前は焼かないと云ふ譯か？」

牧野の眼にはちよいとの間、狡猾さうな表情が浮んだ。

「おれの國の人間は、みんな焼くよ。就中おれなんぞは、——」

其處へ婆さんが勝手から、あつらへ物の蒲焼を運んで來た。

その晩牧野は久しぶりに、妾宅へ泊つて行く事になつた。

雨は彼等が床へはいつてから、雲の音に變り出した。お蓮は牧野が寝入つた後、何故か何

時まで眠られなかつた。彼女の冴えた眼の底には、見た事のない牧野の妻が、いろいろな

姿を浮べたりした。が、彼女は同情は勿論、憎悪も嫉妬も感じなかつた。唯その想像に伴ふ

のは、多少の好奇心ばかりだつた。どう云ふ夫婦喧嘩をするのかしら。——お蓮は戸の外

藪や林が、雲にざわめくのを氣にしながら、眞面目にそんな事も考へて見た。

それでも二時を聞いてしまふと、漸く眠氣がきざして來た。——お蓮は何時か大勢の旅客

と、薄暗い船室に乗り合つてゐる。圓い窓から外を見ると、黒い波の重なつた向うに、月だ

か太陽だか判然しない、妙に赤光のする球があつた。乗合ひの連中はどうした譯か、皆影の

中に坐つた儘、一人も口を開くものがない。お蓮はだんだんこの沈黙が、恐しいやうな氣が

し出した。その内に誰かが彼女の後へ、歩み寄つたらしいけはひがする。彼女は思はず振り

向いた。すると後には別れた男が、悲しさうな微笑を浮かべながら、ちつと彼女を見下してゐる。……

「金さん。」

お蓮は彼女自身の聲に、明け方の眠から覺まされた。牧野はやはり彼女の隣に、静かな呼吸を續けてゐた。が、こちらへ背中を向けた彼が、實際寢入つてゐたのかどうか、それはお蓮にはわからなかつた。

三

お蓮に男のあつた事は、牧野も氣がついてはゐたらしかつた。が、彼はさう云ふ事には、頓着する氣色も見せなかつた。又實際男の方でも、牧野が彼女にのぼせ出すと同時に、ぱつたり遠のいてしまつたから、彼が嫉妬を感じなかつたのも、自然と云へば自然だつた。

しかしお蓮の頭の中には、始終男の事があつた。それは戀しいと云ふよりも、もつと残酷

な感情だつた。何故男が彼女の所へ、突然足踏みもしなくなつたか、——その譯が彼女には呑みこめなかつた。勿論お蓮は何度となく、變り易い世間の男心に、一切の原因を見出さうとした。が、男の來なくなつた前後の事情を考へると、あながちさうばかりも、思はれなかつた。と云つて何か男の方に、已むを得ない事情が起つたとしても、それも知らさず別れるには、彼等二人の間柄は、餘りに深い馴染みだつた。では男の身の上に、不慮の大變でも襲つて來たのか、——お蓮はかう想像するのが、恐しくもあれば望ましくもあつた。……

男の夢を見た二三日後、お蓮は錢湯に行つた歸りに、ふと「身上判斷、玄象道人」と云ふ旗が、或格子戸造りの家に出してあるのが眼に止まつた。その旗は算木を染め出す代りに、赤い穴錢の形を描いた、餘り見慣れない代物だつた。が、お蓮は其處を通りかゝると、急にこの玄象道人に、男が昨今どうしてゐるか、占つて貰はうと云ふ氣になつた。

案内に應じて通されたのは、日當りの好い座敷だつた。その上主人が風流なのか、支那の書棚だの蘭の鉢だの、煎茶家めいた裝飾があるのも、居心の好い空氣をつくつてゐた。

玄象道人は頭を刺つた、恰幅の好い老人だつた。が、金齒を抜めてゐたり、巻煙草をすばすばやる所は、一向道人らしくもない、下品な風采を具へてゐた。お蓮はこの老人の前に、彼女には去年行方知れずになつた親戚のものが一人ある、その行く方を占つて頂きたいと云つた。

すると老人は座敷の隅から、早速二人のまん中へ、紫檀の小机を持ち出した。さうしてその机の上へ、恭しうに青磁の香爐や金欄の袋を並べ立てた。

「その御親戚は御幾つですな？」

お蓮は男の年を答へた。

「ははあ、まだ御若いな。御若い内は兎角間違ひが起りたがる。手前のやうな老爺になつては、——」

玄象道人はじろりとお蓮を見ると、二三度下びた笑ひ聲を出した。

「御生れ年も御存知かな？ いや、よろしい。卯の二白になります。」

老人は金欄の袋から、穴錢を三枚取り出した。穴錢は皆一枚づつ、薄赤い絹に包んであつた。

「私の占ひは擲錢トと云ひます。擲錢トは昔漢の京房が、始めて筮に代へて行つたとある。

御承知でもあらうが、筮と云ふ物は、一爻に三變の次第があり、一卦に十八變の法があるから、容易に吉凶を判じ難い。其處はこの擲錢トの長所でな、……」

さう云ふ内に香爐からは、道人の燻べた香の煙が、明い座敷の中に上り始めた。

四

道人は薄赤い絹を解いて、香爐の煙に一枚づつ、中の穴錢を燻じた後、今度は床に懸けた軸の前へ、丁寧に圓い頭を下げた。軸は狩野派が描いたらしい、伏羲文王周公孔子の四大聖人の畫像だつた。

「惟皇たる上帝、宇宙の神聖、この寶香を聞いて、願くは降臨を賜へ。——猶豫未決せず、

疑ふ所は神靈に質す。請ふ、皇惑を垂れて、速に吉凶を示し給へ。」

そんな祭文が終つてから、道人は紫檀の小机の上へ、ばらりと三枚の穴錢を撒いた。穴錢は一枚は文字が出たが、跡の二枚は波の方だった。道人はすぐに筆を執つて、巻紙にその順序を寫した。

錢を擲けては陰陽を定める、——それが丁度六度續いた。お蓮はその穴錢の順序へ、心配さうな眼を注いでゐた。

「さて——と。」

擲錢が終つた時、老人は巻紙を眺めた儘、少時は唯考へてゐた。

「これは雷水解と云ふ卦でな、諸事思ふやうにはならぬとあります。——」

お蓮は怯づ怯づ三枚の錢から、老人の顔へ視線を移した。

「まづその御親戚とかの若い方にも、二度と御遇ひにはなれさうもないな。」
玄象道人はかう云ひながら、又穴錢を一枚づつ、薄赤い絹に包み始めた。

「では生きては居りませんのでせうか？」

お蓮は聲が震へるのを感じた。「やはりさうか」と云ふ氣もちが、「そんな筈はない」と云ふ氣もちと一しよに、思はず聲へ出たのだつた。

「生きてゐられるか、死んでゐられるかそれはちと判じ悪いが、——兎に角御遇ひにはなれぬものと御思ひなさい。」

「どうしても遇へないでございませうか？」

お蓮に駄目を押された道人は、金綱の袋の口をしめると、脂ぎつた頬のあたりに、ちらりと皮肉らしい表情が浮んだ。

「滄桑の變と云ふ事もある。この東京が森や林にでもなつたら、御遇ひになれぬ事もありますまい。——とまづ、卦にはな、卦にはちやんと出てゐます。」

お蓮は此處へ來た時よりも、一層心細い氣になりながら、高い見料を拂つた後、匆匆家へ歸つて來た。

その晩彼女は長火鉢の前に、ぼんやり頬杖をついたなり、鐵瓶の鳴る音に聞き入つてゐた。玄象道人の占ひは、結局何の解釋をも與へてくれないのと同様だつた。いや、寧ろ積極的に、彼女が密に抱いてゐた希望、——たとひ如何にはかなくとも、やはり希望には違ひない、萬一を期する心もちを打ち碎いたのも同様だつた。男は道人がほのめかしたやうに、實際生きてゐないのであらうか？ さう云へば彼女が住んでゐた町も、當時は物騒な最中だつた。男はお蓮のゐる家へ、不相變通つて來る途中、何か間違ひに遇つたのかも知れない。さもなければ忘れたやうに、ふつり來なくなつてしまつたのは、——お蓮は白粉を刷いた片頬に、炭火の火照りを感じながら、何時か火箸を弄んでゐる彼女自身を見出した。

「金、金、金、——」

灰の上にはさう云ふ字が、何度も書かれたり消されたりした。

五

「金、金、金、——」

さうお蓮が書き續けてゐると、臺所にゐた雇婆さんが、突然かすかな叫び聲を洩らした。この家では臺所と云つても、障子一重開けさへすれば、すぐに其處が板の間だつた。

「何？ 婆や。」

「まあ御新さん。いらしつて御覽なさい。ほんたうに何だと思つたら、——」

お蓮は臺所へ出て行つて見た。

竈が幅をとつた板の間には、障子に映るランプの光が、物靜かな薄暗をつくつてゐた。婆さんはその薄暗の中に、半天の腰を屈めながら、丁度今何か白い獸を抱き上げてゐる所だつた。

「猫かい？」

「いえ、犬でございますよ。」

兩袖を胸に合せたお蓮は、ちつとその犬を覗きこんだ。犬は婆さんに抱かれた儘、水々しい眼を動かしては、頻に鼻を鳴らしてゐた。

「これは今朝程五味溜めの所に、啼いてゐた犬でございますよ。——どうしてはいつて参りましたかしら。」

「お前はちつとも知らなかつたの？」

「はい、その癖此處にさつきから、御茶碗を洗つて居りましたんですが——やつぱり人間眼の悪いと申す事は、仕方のないもんでございますね。」

婆さんは水口の腰障子を開けると、暗い外へ小犬を捨てようとした。

「まあ御待ち、ちよいと私も抱いて見たいから、——」

「御止しなさいませよ。御召しでもよごれるといけません。」

お蓮は婆さんの止めるのも聞かず、兩手にその犬を抱きとつた。犬は彼女の手の内に、ぶるぶる體を震はせてゐた。それが一瞬間過去の世界へ、彼女の心をつれて行つた。お蓮はあの賑やかな家にゐた時、客の來ない夜は一しよに寝る、白い小犬を飼つてゐたのだつた。

「可哀さうに、——飼つてやらうかしら。」

婆さんは妙な瞬きをした。

「ねえ、婆や。飼つてやらうよ。お前に面倒はかけないから、——」

お蓮は犬を板の間へ下すと、無邪氣な笑顔を見せながら、もう肴でも探してやる氣か、臺所の戸棚に手をかけてゐた。

その翌日から妾宅には、赤い頸環に飾られた犬が、臺の上にあるやうになつた。

綺麗好きな婆さんは、勿論この變化を悦ばなかつた。殊に庭へ下りた犬が、泥足の儘上つて來なぞすると、一日腹を立ててゐる事もあつた。が、外に仕事のないお蓮は、子供のやうに犬を可愛がつた。食事の時にも膳の側には、必ず犬が控へてゐた。夜は又彼女の夜着の裾に、まるまる寝てゐる犬を見るのが、文字通り毎夜の事だつた。

「その時分から私は、嫌だ嫌だと思つてゐましたよ。何しろ薄暗いランプの光に、あの白犬が御新造の寝顔をしげしげ見てゐた事もあつたんですから、——」

婆さんは彼是一年の後、私の友人のKと云ふ醫者に、こんな事も話して聞かせたさうで

ある。

六

この小犬に惱まされたものは、雇婆さん一人ではなかつた。牧野も犬が疊の上に、寝そべつてゐるのを見た時には、不快さうに太い眉をひそめた。

「何だい、こいつは？——畜生、あつちへ行け。」

陸軍主計の軍服を着た牧野は、邪慳に犬を足蹴にした。犬は彼が座敷へ通ると、白い背中の毛を逆立てながら、無性に吠え立て始めたのだつた。

「お前の犬好きにも呆れるぜ。」

晩酌の膳に就いてからも、牧野はまだ忌々しさうに、じろじろ犬を眺めてゐた。

「前にもこの位なやつを飼つてゐたぢやないか？」

「え、あれもやつぱり白犬でしたわ。」

「さう云へばお前があの犬と、何でも別れないと云ひ出したのにや、随分手こずらされたものだつたけ。」

お蓮は膝の小犬を撫でながら、仕方なさうな微笑を洩らした。汽船や汽車の旅を続けるのに、犬をつれて行く事が面倒なのは、彼女にもよくわかつてゐた。が、男とも別れた今、その白犬を後に残して、見ず知らずの他國へ行くのは、どう考へて見ても寂しかつた。だから愈々立つと云ふ前夜、彼女は犬を抱き上げては、その鼻に頬をすりつけながら、何度も止めどない啜り泣きを呑みこみ呑みこみしたものだつた。……

「あの犬は中々利巧だつたが、こいつはどうも莫迦らしいな。第一人相が、——人相ぢやない。犬相だが、——犬相が、——平凡だよ。」

もう酔のまはつた牧野は、初の不快も忘れたやうに、刺身などを犬に投げてやつた。

「あら、あの犬によく似てゐるぢやありませんか？ 違ふのは鼻の色だけですわ。」

「何、鼻の色が違ふ？ 妙な所が又違つたものだな。」

「この犬は鼻が黒いでせう。あの犬は鼻が赭うござんしたよ。」

お蓮は牧野の酌をしながら、前に飼つてゐた犬の鼻が、はつきり眼の前に見えるやうな気がした。それは始終涎に濡れた、丁度子持ちの乳房のやうに、蔦色の斑がある鼻づらだつた。

「へええ、して見ると鼻の赭い方が、犬では美人の相なのかも知れない。」

「美男ですよ、あの犬は。これは黒いから、醜男ですわね。」

「男かい、二匹とも。此處の家へ来る男は、おればかりかと思つたが、——こりやちと怪しからんな。」

牧野はお蓮の手を突つきながら、彼一人上機嫌に笑ひ崩れた。

しかし牧野は何時まで、その景氣を保つてゐられなかつた。犬は彼等が床へはひると、古襖一重隔てた向うに、何度も悲しさうな聲を立てた。のみならずしまひには其襖へ、がりがり前足の爪をかけた。牧野は深夜のランプの光に、妙な苦笑を浮べながら、たうとうお蓮へ聲をかけた。

「おい、其處を開けてやれよ。」

が、彼女が襖を開けると、犬は存外ゆつくりと、二人の枕もとへはひつて來た。さうして白い影のやうに、其處へ腹を落着けたなり、ちつと彼等を眺め出した。

お蓮は何だかその眼つきが、人のやうな氣がしてならなかつた。

七

それから二三日経つた或夜、お蓮は本宅を抜けて來た牧野と、近所の寄席へ出かけて行つた。

手品、劍舞、幻燈、大神樂——さう云ふ物ばかりかゝつてゐた寄席は、身動きも出來ない程大入りだつた。二人は少時待たされた後、やつと高座には遠い所へ、窮屈な腰を下す事が出來た。彼等が其處へ坐つた時、あたりの客は云ひ合はせたやうに、丸髷に結つたお蓮の姿へ、物珍しさうな視線を送つた。彼女にはそれが晴がましくもあれば、同時に又何故か寂し

くもあつた。

高座には明るい吊ランプの下に、白い鉢巻をした男が、長い抜き身を振りまはしてゐた。さうして樂屋からは朗々と「踏み破る千山萬岳の煙」とか云ふ、詩をうたふ聲が起つてゐた。お蓮にはその劍舞は勿論、詩吟も退屈なばかりだつた。が、牧野は巻煙草へ火をつけたながら、面白さうにそれを眺めてゐた。

劍舞の次は幻燈だつた。高座に下した幕の上には、日清戦争の光景が、いろ／＼映つたり消えたりした。大きな水柱を揚げながら、「定遠」の沈没する所もあつた。敵の赤兒を抱いた樋口大尉が、突撃を指揮する所もあつた。大勢の客はその畫の中に、たまたま日章旗が現れなぞすると、必、盛な喝采を送つた。中には「帝國萬歳」と、頓狂な聲を出すものもあつた。しかし實戦に臨んで來た牧野は、さう云ふ連中とは没交渉に、唯にやにやと笑つてゐた。

「戦争もあの通りだと、樂なもんだが、——」

彼は牛莊の激戦の畫を見ながら、半ば近所へも聞かせるやうに、かうお蓮へ話しかけた。

が、彼女は不相變、熱心に幕へ眼をやつた儘、かすかに頷いたばかりだつた。それは勿論どんな畫でも、幻燈が珍しい彼女にとつては、興味があつたのに違ひなかつた。しかしその外にも畫面の景色は、——雪の積つた城樓の屋根だの、枯柳に繋いだ兎馬だの、辮髪を垂れた支那兵だのは、特に彼女を動かすべき理由も持つてゐたのだつた。

寄席がはねたのは十時だつた。二人は肩を並べながら、しまうた家ばかり續いてゐる、人氣のない町を歩いて來た。町の上には半輪の月が、霜の下りた家々の屋根へ、寒い光を流してゐた。牧野はその光の中へ、時々巻煙草の煙を吹いては、さつきの劍舞でも頭にあるのか、「鞭聲肅々夜河を渡る」などと、古臭い詩の句を微吟したりした。

所が横町を一つ曲ると、突然お蓮は慄えたやうに、牧野の外套の袖を引いた。

「びつくりさせるぜ。何だ？」

彼はまだ足を止めずに、お蓮の方へ振り返つた。

「誰か呼んでゐるやうですもの。」

お蓮は彼に寄り添ひながら、氣味の悪さうな眼つきをしてゐた。
「呼んでゐる？」

牧野は思はず足を止めると、ちよいと耳を澄ませて見た。が、寂しい往來には、犬の吠える聲さへ聞えなかつた。

「空耳だよ。何が呼んでなんぞゐるものか。」

「氣のせるですかしら。」

「あんな幻燈を見たからちやないか？」

八

寄席へ行つた翌朝だつた。お蓮は房楊枝を啣へながら、顔を洗ひに縁側へ行つた。縁側にはもう何時もの通り、銅の耳盥に湯を汲んだのが、鉢前の前に置いてあつた。

冬枯の庭は寂しかつた。庭の向うに續いた景色も、曇天を映した川の水と一しよに、荒涼

を極めたものだつた。が、その景色が眼にはいると、お蓮は嗽ひを使ひながら、今までは全然忘れてゐた昨夜の夢を思ひ出した。

それは彼女がたつた一人、暗い藪だか林だかの中を歩き廻つてゐる夢だつた。彼女は細い路を辿りながら、「たうとう私の念力が届いた。東京はもう見渡す限り、人氣のない森に變つてゐる。きつと今に金さんにも、遇ふ事が出来るのに違ひない。」——そんな事を思ひ續けてゐた。すると少時歩いてゐる内に、大砲の音や小銃の音が、何處とも知らず聞え出した。と同時に木々の空が、まるで火事でも映すやうに、だんだん赤濁りを帯び始めた。「戦争だ。戦争だ。」——彼女はさう思ひながら、一生懸命に走らうとした。が、いくら氣負つて見ても、何故か一向走れなかつた。……

お蓮は顔を洗つてしまふと、手水を使ふ爲に肌を脱いだ。その時何か冷たい物が、べたりと彼女の背中に觸れた。

「しつー」

彼女は格別驚きもせず、艶いた眼を後へ投げた。其處には小犬が尾を振りながら、頻に黒い鼻を舐め廻してゐた。

九

牧野はその後二三日すると、何時もより早めに妾宅へ、田宮と云ふ男と遊びに来た。或有名な御用商人の店へ、番頭格に通つてゐる田宮は、お蓮が牧野に圍はれるのに就いても、いろいろ世話をしてくれた人物だつた。

「妙なもんぢやないか？　かうやつて丸鬚に結つてゐると、どうしても昔のお蓮さんとは見えぬ。」

田宮は明るいランプの光に、薄痘痕のある顔を火照らせながら、向ひ合つた牧野へ盃をさした。

「ねえ、牧野さん。これが島田に結つてゐたとか、赤熊に結つてゐたとか云ふんなら、かう

も違つちや見えまいがね、何しろ以前が以前だから、——」

「おい、おい、此處の婆さんは眼は少し悪いやうだが、耳は遠くもないんだからね。」

牧野はさう注意はしても、嬉しさうににやにや笑つてゐた。

「大丈夫。聞えた所がわかるもんか。——ねえ、お蓮さん。あの時分の事を考へると、まるで夢のやうぢやありませんか。」

お蓮は眼を外らせた儘、膝の上の小犬にからかつてゐた。

「私も牧野さんに頼まれたから、一度は引き受けて見たやうなもの、萬一ばれた日にや大事だと、無事に神戸へ上がるまでにや、随分これでも氣を揉みましたぜ。」

「へん、さう云ふ危い橋なら、渡りつけてゐるだらうに、——」

「冗談云つちやいけない。人間の密輸入はまだ一度ぎりだ。」

田宮は一盃ぐいとやりながら、わざとらしい澁面をつくつて見せた。

「だがお蓮の今日あるを得たのは、實際君のおかげだよ。」

牧野は太い腕を伸ばして、田宮へ猪口をさしつけた。

「さう云はれると恐れ入るが、兎に角あの時は弱つたよ。おまけに又乗った船が、丁度玄海へかゝつたとすると、恐ろしいしけを食つてね。——ねえ、お蓮さん。」

「え、私はもう船も何も、沈んでしまふかと思ひましたよ。」

お蓮は田宮の酌をしながら、やつと話に調子を合はせた。が、あの船が沈んでゐたら、今よりは反つて益かも知れない。——そんな事もふと考へられた。

「それがまあかうしてゐられるんだから、御互様に仕合せでさあ。——だがね、牧野さん。

お蓮さんに丸鬘が似合ふやうになると、もう一度又昔のなりに、返らせて見たい氣もしやしないか？」

「返らせたかつた所が、仕方がないぢやないか？」

「ないがさ、——ないと云へば昔の着物は、一つもこつちへは持つて來なかつたかい？」

「着物所か櫛簪までも、ちゃんと御持参になつてゐる。いくら僕が止せと云つても、一向

御取上げにならなかつたんだから、——」

牧野はちらりと長火鉢越しに、お蓮の顔へ眼を送つた。お蓮はその言葉も聞えないやうに、鐵瓶のぬるんだのを氣にしてゐた。

「そいつは猶更好都合だ。——どうです？ お蓮さん。その内に一つなりを變へて、御酌を願はうぢやありませんか？」

「さうして君も序ながら、昔馴染を一人思ひ出すか。」

「さあ、その昔馴染みと云ふやつがね、お蓮さんのやうに好縹緞だと、思ひ出し甲斐もあると云ふものだが、——」

田宮は薄痘痕のある顔に、揆つたさうな笑ひを浮かべながら、すり芋を箸に搦んでゐた。……

その晩田宮が歸つてから、牧野は何も知らなかつたお蓮に、近々陸軍を止め次第、商人になると云ふ話をした。辭職の許可が出さへすれば、田宮が今使はれてゐる、或名高い御用商

人が、すぐに高給で抱へてくれる、——何でもさう云ふ話だった。

「さうすりや此處にゐなくとも好いから、何處か手広い家へ引つ越さうぢやないか？」

牧野はさも疲れたやうに、火鉢の前へ寝ころんだ儘、田宮が土産に持つて來たマニラの葉巻を吹かしてゐた。

「この家だつて澤山ですよ。婆やと私と二人ぎりですもの。」

お蓮は意地のきたない犬へ、残り物を當てがふのに忙しかつた。

「さうなつたら、おれも一しよにゐるさ。」

「だつて御新造がゐるぢやありませんか？」

「鼻かい？ 鼻とも近々別れる筈だよ。」

牧野の口調や顔色では、この意外な消息も、滿更冗談とは思はれなかつた。

「あんまり罪な事をするのは御止しなさいよ。」

「かまふものか。己に出で、己に返るさ。おれの方ばかり悪いんぢやない。」

牧野は険しい眼をしながら、やけに葉巻をすばすばやつた。お蓮は寂しい顔をしたなり、少時は何とも答へなかつた。

十

「あの白犬が病みついたのは、——さうさう、田宮の旦那が御見えになつた、丁度その明る日ですよ。」

お蓮に使はれてゐた婆さんは、私の友人のKと云ふ醫者に、かう當時の容子を話した。

「大方食中りか何かだつたんでせう。始は毎日長火鉢の前に、ぼんやり寝てゐるばかりでしたが、その内に時々どうかすると、疊をよこすやうになつたんです。御新造は何しろ子供のやうに可愛がつていらした犬ですから、わざ／＼牛乳を取つてやつたり、寶丹を口へ脚ませてやつたり、随分大事になさいました。それに不思議はないんです。ないんですが、嫌ぢやありませんか？ 犬の病氣が悪くなると、御新造が犬と話をなさるのも、だん／＼珍し

くなくなつたんです。

「そりや話をなさると云つても、つまりは御新造が犬を相手に、長々と獨り語を仰有るんですが、夜更けにでもその聲が聞えて御覽なさい。何だか犬も人間のやうに、口を利いてゐさうな氣がして、あんまり好い氣はしないもんですよ。それでなくつても一度などは、或からつ風のひどかつた日に、御使ひに行つて歸つて來ると、——その御使ひも近所の占ひ者の所へ、犬の病氣を見て貰ひに行つたんですが、——御使ひに行つて歸つて來ると、障子のがたがた云ふ御座敷に、御新造の話し聲が聞えるんでせう。こりや旦那様でもいらしたかと思つて、障子の隙間から覗いて見ると、やつぱり其處にはたつた一人、御新造がいらつしやるだけなんです。おまけに風に吹かれた雲が、御日様の前を飛ぶからですが、膝へ犬をのせた御新造の姿が、しつきりなしに明くなつたり暗くなつたりするぢやありませんか？ あんなに氣味の悪かつた事は、この年になつてもまだ二度とは、出つくはした覺えがない位ですよ。」

「ですから犬が死んだ時には、そりや御新造には御氣の毒でしたが、こちらは内々ほつとしたもんです。尤もそれが嬉しかつたのは、犬が粗糲をする度に、掃除をしなければならなかつた私ばかりぢやありません。旦那様もその事を御聞きになると、厄介拂ひをしたと云ふやうに、にやにや笑つて御出でになりました。犬ですか？ 犬は何でも、御新造はもとより、私もまだ起きない内に、鏡臺の前へ仆れた儘、青い物を吐いて死んでゐたんです。氣がなさうに長火鉢の前に、寝てばかりゐるやうになつてから、彼是半月にもなりましたかしら。

……」

丁度薬研堀の市の立つ日、お蓮は大きな鏡臺の前に、息の絶えた犬を見出した。犬は婆さんが話した通り、青い吐物の流れた中に、冷たい體を横たへてゐた。これは彼女もとうの昔に、覺悟をきめてゐた事だつた。前の犬には生別れをしたが、今度の犬には死別れをした。所詮犬は飼へないのが、持つて生まれた因縁かも知れない。——そんな事が唯彼女の心へ、絶望的な静かさをのしかゝらせたばかりだつた。

お蓮は其處へ坐つたなり、茫然と犬の屍骸を眺めた。それから懶い眼を擧げて、寒い鏡の面を眺めた。鏡には疊に仆れた犬が、彼女と一しよに映つてゐた。その犬の影をちつと見ると、お蓮は目まひでも起つたやうに、突然兩手に顔を掩つた。さうしてかすかな叫び聲を洩らした。

鏡の中の犬の屍骸は、何時か黒かるべき鼻の先が、赭い色に變つてゐたのだつた。

十一

妾宅の新年は寂しかつた。門には竹が立てられたり、座敷には蓬萊が飾られたりしても、お蓮は獨り長火鉢の前に、屈托らしい頬杖をついては、障子の日影が薄くなるのに、懶い眼ばかり注いでゐた。

暮に犬に死なれて以來、唯でさへ浮かない彼女の心は、ややともすると發作的な憂鬱に襲はれ易かつた。彼女は犬の事ばかりか、未にわからない男の在りかや、どうかすると顔さへ

知らない、牧野の妻の身の上までも、いろいろ思ひ惱んだりした。と同時に又その頃から、折々妙な幻覺にも、惱まされるやうになり始めた。――

或時は床へはひつた彼女が、やつと眠に就かうとすると、突然何かがのつたやうに、夜着の裾がじはりりと重くなつた。小犬はまだ生きてゐた時分、彼女の蒲團の上へ來ては、よくころりと横になつた。――丁度それと同じやうに、柔かな重みがかかつたのだつた。お蓮はすぐに枕から、そつと頭を浮かせて見た。が、其處には搔卷の格子模様か、ランプの光に浮んでゐる外は、何物もゐるとは思はれなかつた。……

又或時は鏡臺の前に、お蓮が髪を直してゐると、鏡へ映つた彼女の後を、ちらりと白い物が通つた。彼女はそれでも氣をとめずに、水々しい髪を掻き上げてゐた。すると其白い物は、前とは反對の方向へ、もう一度咄嗟に通り過ぎた。お蓮は櫛を持つた儘、とうとう後を振り返つた。しかし明い座敷の中には、何も生き物のけはひはなかつた。やつぱり眼のせみだつたかしら、――さう思ひながら、鏡へ向ふと、少時の後白い物は、三度彼女の後を通つた。

又或時は長火鉢の前に、お蓮が獨り坐つてゐると、遠い外の往來に、彼女の名を呼ぶ聲が聞えた。それは門の竹の葉が、さはめく音に交りながら、たつた一度聞えたのだつた。が、その聲は東京へ來ても、始終心にかかつてゐた男の聲に違ひなかつた。お蓮は息をひそめるやうに、ちつと注意深い耳を澄ませた。その時又往來に、今度は前よりも近々と、なつかしい男の聲が聞えた。と思ふと何時の間にか、それは風に吹き散らされる犬の聲に變つてゐた。……

又或時はふと眼がさめると、彼女と一つ床の中に、ゐない筈の男が眠つてゐた。迫つた額長い睫毛——、すべてが夜半のランプの光に、寸分も以前と變らなかつた。左の眼尻に黒子があつたが、——そんな事さへ檢べて見ても、やはり確に男だつた。お蓮は不思議に思ふよりは、嬉しさに心を躍らせながら、その儘體も消え入るやうに、男の頸へすがりついた。しかし眼を破られた男が、うるささうに何か呟いた聲は、意外にも牧野に違ひなかつた。のみ

ならずお蓮はその刹那に、實際酒臭い牧野の頸へ、しつかり両手をからんでゐる彼女自身を見出したのだつた。

しかしさう云ふ幻覺の外にも、お蓮の心を擾すやうな事件は、現實の世界からも起つて來た。と云ふのは松もとれない内に、噂に聞いてゐた牧野の妻が、突然訪ねて來た事だつた。

十二

牧野の妻が訪れたのは、生憎例の雇婆さんが、使ひに行つてゐる留守だつた。案内を請ふ聲に驚かされたお蓮は、やむを得ず氣のない體を起して、薄暗い玄關へ出かけて行つた。すると北向きの格子戸が、軒さきの御飾りを透せてゐる、——其處にひどく顔色の悪い、眼鏡をかけた女が一人、餘り新しくない肩掛をした儘、俯向き勝に佇んでゐた。

「どなた様でございますか？」

お蓮はさう尋ねながら、相手の正體を直覺してゐた。さうしてこの根の抜けた丸鬚に、小

紋の羽織の袖を合せた、何處か影の薄い女の顔へ、ちつと眼を注いでゐた。

「私は——」

女はちよいとためらつた後、やはり俯向き勝に話し續けた。

「私は牧野の家内でございます。瀧と云ふものでございます。」

今度はお蓮が口ごもつた。

「さやうでございますか。私は——」

「いえ、それはもう存じて居ります。牧野が始終御世話になりますさうで、私からも御禮を申し上げます。」

女の言葉は穩だつた。皮肉らしい調子などは、不思議な程罩つてゐなかつた。それだけ又お蓮は何と云つて好いか、挨拶のしやうに困るのだつた。

「就きましては今日は御年始かたがた、ちと御願ひがあつて参りましたが、——」

「何でございますか、私に出来る事でございますましたら——」

まだ油斷をしなかつたお蓮は、略その「御願ひ」もわかりさうな氣がした。と同時にそれを切り出された場合、答ふべき文句も多さうな氣がした。しかし伏眼勝ちな牧野の妻が、靜に述べ始めた言葉を聞くと、彼女の豫想は根本から、間違つてゐた事が明かになつた。

「いえ、御願ひと申しました所が、大した事でもございませんが、——實は近々に東京中が、森になるさうでございますから、その節はどうか牧野同様、私も御宅へ御置き下さいまし。御願ひと云ふのはこれだけでございます。」

相手はゆつくりこんな事を云つた。その容子はまるで彼女の言葉が、如何に氣違ひじみてゐるかも、全然氣づいてゐないやうだつた。お蓮は呆氣にとられたなり、少時は唯外光に背いた、この陰氣な女の姿を見つめてゐるより外はなかつた。

「如何でございますませう？ 置いて頂けませうか？」

お蓮は舌が剛ばつたやうに、何とも返事が出来なかつた。何時か顔を擡げた相手は、細々と冷たい眼を開きながら、眼鏡越しに彼女を見つめてゐる、——それが猶更お蓮には、すべ

てが一場の悪夢のやうな、氣味の悪い心地を起させるのだつた。
 「私はもとよりどうなつても、かまはない體でございますが、萬一路頭に迷ふやうな事があ
 りましては、二人の子供が可哀さうでございます。どうか御面倒でもあなたの御宅へ、お置
 きなすつて下さいまし。」

牧野の妻はかう云ふと、古びた肩掛に顔を隠しながら、突然しくしく泣き始めた。すると
 何故か黙つてゐたお蓮も、急に悲しい氣がして來た。やつと金さんにも遇へる時が來たのだ、
 嬉しい。嬉しい。——彼女はさう思ひながら、それでも春着の膝の上へ、やはり涙を落して
 ゐる彼女自身を見出したのだつた。

が、何分か過ぎ去つた後、お蓮がふと氣がついて見ると、薄暗い北向きの玄關には、何時
 の間に相手は歸つたのか、誰も人影が見えなかつた。

十二

七草の夜、牧野が妾宅へやつて來ると、お蓮は早速彼の妻が、訪ねて來たいきさつを話し
 て聞かせた。が、牧野は案外平然と、彼女に耳を借した儘、マニラの葉巻きばかり燻らせて
 ゐた。

「御新造はどうかしてゐるんですよ。」

何時か興奮し出したお蓮は、苛立たしい眉をひそめながら、剛情に猶も云ひ續けた。

「今の内に何とかして上げないと、取り返しつかない事になりますよ。」

「まあ、なつたらなつた時の事さ。」

牧野は葉巻きの煙の中から、薄眼に彼女を眺めてゐた。

「驕の事なんぞを案じるよりや、お前こそ體に氣をつけるが好い。何だかこの頃は何時來て
 見ても、ふさいでばかりゐるぢやないか？」

「私はどうなつても好いんですけれど、——」

「好くはないよ。」

お蓮は顔を曇らせたなり、少時は口を噤んでゐた。が、突然涙ぐんだ眼を擧げると、
 「あなた、後生ですから、御新造を捨てないで下さい。」と云つた。
 牧野は呆氣にとられたのか、何とも答を返さなかつた。

「後生ですから、ねえ、あなた——」

お蓮は涙を隠すやうに、黒繻子の襟へ顎を埋めた。

「御新造は世の中にあなた一人が、何よりも大事なんですもの。それを考へて上げなくつちや、薄情すぎると云ふもんですよ。私の國でも女と云ふものは、——」

「好いよ。好いよ。お前の云ふ事はよくわかつたから、そんな心配なんぞはしない方が好いよ。」

葉卷きを吸ふのも忘れた牧野は、子供を欺すやうにかう云つた。

「一體この家が陰氣だからね、——さうさう、この間は又犬が死んだりしてゐる。だからお前も氣がふさぐんだ。その内に何處か好い所があつたら、早速引越してしまはうぢやない

か？ さうして陽氣に暮すんだね、——何、もう十日も経ちさへすりや、おれは役人をやめてしまふんだから、——」

お蓮は殆その晩中、いくら牧野が慰めても、浮かない顔色を改めなかつた。……

「御新造の事では旦那様も、随分御心配なすつたもんですが、——」

Kにいろいろ尋かれた時、婆さんは又當時の容子をかう話したとか云ふ事だつた。

「何しろ今度の御病氣は、あの時分にもうきざしてゐたんですから、やつぱりまあ旦那様始め、御詮めになる外はありませんまい。現に本宅の御新造が、不意に横網へ御出でなすつた時でも、私が御使ひから歸つて見ると、こちらの御新造は御玄關先へ、ぼんやりと唯坐つていらつしやる、——夫を眼鏡越しに睨みながら、あちらの御新造は又上らうともなさらず、悪丁寧な嫌味のありつたけを並べて御出でなさる始末なんです。

「そりや御主人が毒づかれるのは、陰に聞いてゐる私にも、好い氣のするもんぢやありません。けれども私が其處へ出ると、餘計事がむづかしいんです。——と云ふのは私も四

五年前には、御本宅に使はれてゐたもんですから、あちらの御新造に見つかつたが最後、反つて先様の御腹立ちを煽る事になるかも知れませんが。そんな事があつては大變ですから、私は御本宅の御新造が、さんさん悪態を御つきになつた揚句、御歸りになつてしまふまでは、とうとう御玄關の襖の蔭から、顔を出さずにしまひました。

「所がこちらの御新造は、私の顔を御覽になると、『婆や、今し方御新造が御見えなすつたよ。私なんぞの所へ來ても、嫌味一つ云はないんだから、あれがほんたうの結構人だらうね』と、かう仰有るぢやありませんか？ さうかと思ふと笑ひながら『何でも近々に東京中が、森になるつて云つてゐたつけ。可哀さうにあの人は、氣が少し變なんだよ』と、そんな事さへ仰有るんですよ。……」

十四

しかしお蓮の憂鬱は、二月にはひつて間もない頃、やはり本所の松井町にある、手廣い二

階家へ住むやうになつても、不相變晴れさうな氣色はなかつた。彼女は婆さんとも口を利かず、大抵は茶の間になつた一人、鐵瓶のたぎりを聞き暮してゐた。

すると其處へ移つてから、まだ一週間も経たない或夜、もう何處かで飲んだ田宮が、ふらりと妾宅へ遊びに來た。丁度一杯始めてゐた牧野は、この飲み仲間の顔を見ると、早速手にあつた猪口をさした。田宮はその猪口を貰ふ前に、襯衣を覗かせた。懐から、赤い鐘詰を一つ出した。さうしてお蓮の酌を受けながら、

「これは御土産です。お蓮夫人。これはあなたへ御土産です。」と云つた。

「何だい、これは？」

牧野はお蓮が禮を云ふ間に、その鐘詰を取り上げて見た。

「貼紙を見給へ。臘納獸だよ。臘納獸の鐘詰さ。——あなたは氣のふさぐのが病だつて云ふから、これを一つ献上します。産前、産後、婦人病一切によろしい。——これは僕の友だちに聞いた能書きだがね、そいつがやり始めた鐘詰だよ。」

田宮は肩を嘗めまはしては、彼等二人を見比べてゐた。

「食へるかい、お前、臍肭獸なんぞが？」

お蓮は牧野にかう云はれても、無理にちよいと口元へ、微笑を見せたばかりだつた。が、田宮は手を振りながら、すぐにその答へを引き受けた。

「大丈夫。大丈夫だとも。——ねえ、お蓮さん。この臍肭獸と云ふやつは、牡が一匹ゐる所には、牝が百匹もくつゝいてゐる。まあ人間にすると、牧野さんと云ふ所です。さう云へば顔も似てゐますな。だからです。だから一つ牧野さんだと思つて、——可愛い牧野さんだと思つて御上んなさい。」

「何を云つてゐるんだ。」

牧野はやむを得ず苦笑した。

「牡が一匹ゐる所に、——ねえ、牧野さん、君によく似てゐるだらう。」

田宮は薄痘痕のある顔に、一ばいの笑ひを浮べたなり、委細かまはずしやべり續けた。

「今日僕の友だちに、——この鐘詰屋に聞いたんだが、臍肭獸と云ふやつは、牡同志が牝を取り合ふと、——さうさう、臍肭獸の話よりや、今夜は一つお蓮さんに、昔のなりを見せて貰ふんだつた。どうです？ お蓮さん。今こそお蓮さんなんぞと云つてゐるが、お蓮さんは世を忍ぶ假の名さ。此處は一番音羽屋で行きたいね。お蓮さんとは——」

「おい、おい、牝を取り合ふとどうするんだ？ その方をまづ伺ひたいね。」

迷惑らしい顔をした牧野は、やつともう一度臍肭獸の話へ、危険な話題を一轉させた。

「牝を取り合ふとか？ 牝を取り合ふと、大喧嘩をするんださうだ。その代りだね、その代り正々堂々とやる。君のやうに暗打ちなんぞは食はせない。いや、こりや失禮。禁句禁句看板の甚九郎だつて。——お蓮さん。一つ、獻じませう。」

田宮は色を變へた牧野に、ちらりと顔を覗かれると、それ隠しにお蓮へ盃をさした。しかしお蓮は無氣味な程、ちつと彼を見つめたぎり、手も出さうとはしなかつた。

十五

お蓮が床を抜け出したのは、その夜の三時過ぎだった。彼女は二階の寢間を後に、そつと暗い梯子を下りると、手さぐりに鏡臺の前へ行つた。さうしてその抽斗から、剃刀の箱を取り出した。

「牧野め。牧野の畜生め。」

お蓮はさう呟きはがら、靜に箱の中の物を抜いた。その拍子に剃刀の匂が、磨ぎ澄ました鋼の匂が、かすかに彼女の鼻を打つた。

何時か彼女の心の中には、狂暴な野性が動いてゐた。それは彼女が身を賣るまでに、邪慳な繼母との争ひから、荒む儘に任せた野性だった。白粉が地肌を隠したやうに、この數年間の生活が押し隠してゐた野性だった。………

「牧野め。鬼め。二度の日の目は見せないから、——」

お蓮は派手な長襦袢の袖に、一挺の剃刀を藏つたなり、鏡臺の前に立ち上つた。すると突然かすかな聲が、何處からか彼女の耳へはいつた。

「御止し。御止し。」

彼女は思はず息を呑んだ。が、聲だと思つたのは、時計の振子が暗い中に、秒を刻んでゐる音らしかつた。

「御止し。御止し。御止し。」

しかし梯子を上りかけると、聲はもう一度お蓮を捉へた。彼女は其處へ立ち止りながら、茶の間の暗闇を透かして見た。

「誰だい？」

「私。私だよ。私。」

聲は彼女と仲が好かつた、服鞆の一人に違ひなかつた。

「一枝さんかい？」

「ああ、私。」

「久しぶりだねえ。お前さんは今何處にゐるの？」

お蓮は何時か長火鉢の前へ、晝間のやうに坐つてゐた。

「御止し。御止しよ。」

聲は彼女の間に答へず、何度も同じ事を繰返すのだつた。

「何故又お前さんまでが止めるのさ？ 殺したつて好いちやないか？」

「お止し。生きてゐるもの。生きてゐるよ。」

「生きてゐる？ 誰が？」

其處に長い沈黙があつた。時計はその沈黙の中にも、休まない振子を鳴らしてゐた。

「誰が生きてゐるのさ？」

少時無言が続いた後、お蓮がかう問ひ直すと、聲はやつと彼女の耳に、懐しい名前を囁いてくれた。

「金——金さん。金さん。」

「ほんたうかい？ ほんたうなら嬉しいけれど、——」

お蓮は頬杖をついた儘、物思はしさうな眼つきになつた。

「だつて金さんが生きてゐるんなら、私に會ひに来さうなもんぢやないか？」

「来るよ。來るとさ。」

「來るつて？ 何時？」

「明日。彌勒寺へ會ひに来るとさ。彌勒寺へ。明日の晩。」

「彌勒寺つて、彌勒寺橋だらうねえ。」

「彌勒寺橋へね。夜來る。來るとさ。」

それぎり聲は聞えなくなつた。が、長襦袢一つのお蓮は、夜明前の寒さも知らないやうに、長い間ちつと坐つてゐた。

十六

お蓮は翌日の午過ぎまでも、二階の寢室を離れなかつた。が、四時頃やつと床を出ると、何時もより念入りに化粧をした。それから芝居でも見に行くやうに、上着も下着も悉く一番好い着物を着始めた。

「おい、おい、何だつて又そんなにめかすんだい？」

その日は一日店へも行かず、妾宅にころころしてゐた牧野は、風俗畫報を擴げながら、不審さうに彼女へ聲をかけた。

「ちよいと行く所がありますから、——」

お蓮は冷然と鏡臺の前に、鹿の子の帯上げを結んでゐた。

「何處へ？」

「彌勒寺橋まで行けば好いんです。」

「彌勒寺橋？」

牧野はそろそろ訝るよりも、不安になつて來たらしかつた。それがお蓮には何とも云へない愉快な心もちを咬るのだつた。

「彌勒寺橋に何の用があるんだい？」

「何の用ですか、——」

彼女はちらりと牧野の顔へ、侮蔑の眼の色を送りながら、靜に帯止めの金物を合せた。

「それでも安心して下さい。身なんぞ投げはしませんから、——」

「莫迦な事を云ふな。」

牧野はばたりと疊の上へ、風俗畫報を抛り出すと、忌々しさうに舌打ちをした。……

「彼はその晩の七時頃ださうだ。——」

今までの事情を話した後、私の友人のKと云ふ醫者は、徐にかう言葉を續けた。

「お蓮は牧野が止めるのも聞かず、たつた一人家を出て行つた。何しろ婆さんなどが心配し

て、いくら一しよに行きたいと云つても、當人がまるで子供のやうに、一人にしなければ死んでしまふと、駄々をこねるんだから仕方がない。が、勿論お蓮一人、出してやれたもんぢやないから、其處は牧野が見え隠れに、ついて行く事にしたんださうだ。

「所が外へ出て見ると、その晩は丁度彌勒寺橋の近くに、薬師の縁日が立つてゐる。だから二つ目の往來は、いくら寒い時分でも、押し合はないばかりの人通りだ。これはお蓮の跡をつけるには、都合が好かつたのに違ひない。牧野がすぐ後を歩きながら、とうとう相手に氣づかれなかつたのも、畢竟は縁日の御蔭なんだ。

「往來にはずつと兩側に、縁日商人が並んでゐる。そのカンテラやランプの明りに、飴屋の渦巻の看板だの豆屋の赤い日傘だのが、右にも左にもちらつくんだ。が、お蓮はそんな物には、全然側目もふらないらしい。唯心もち俯向いたなり、さつさと人ごみを縫つて行くんだ。何でも遅れずに歩くのは、牧野にも骨が折れたさうだから、餘程先を急いでゐたんだらう。

「その内に彌勒寺橋の袂へ來ると、お蓮はやつと足を止めて、茫然とあたりを見廻したさう

だ。あすこには河岸へ曲つた所に、植木屋ばかりが続いてゐる。どうせ縁日物だから、大した植木がある譯ぢやないが、兎も角も松とか檜とかが、此處だけは人足の疎な通りに、水々しい枝葉を茂らしてゐるんだ。

「こんな所へ來たは好いが、一體どうする氣なんだらう？——牧野はさう疑ひながら、少時は橋づめの電柱の蔭に、妾の容子を窺つてゐた。が、お蓮は不相變、ぼんやり其處に佇んだ儘、植木の並んだのを眺めてゐる。そこで牧野は相手の後へ、忍び足にそつと近よつて見た。するとお蓮は嬉しさうに、何度もかう云ふ獨り語を呟いてゐたと云ふぢやないか？——「森になつたんだねえ。とうとう東京も森になつたんだねえ。……」

十七

「それだけならばまだ好いが、——」
Kは更に話し續けた。

「其處へ雪のやうな小犬が一匹、偶然人ごみを抜けて來ると、お蓮はいきなり兩手を伸ばして、その白犬を抱き上げたさうだ。さうして何を云ふかと思へば、「お前も來てくれたのかい？ 随分此處までは遠かつたらう。何しろ途中には山もあれば、大きな海もあるんだからね。ほんたうにお前に別れてから、一日も泣かずにゐた事はないよ。お前の代りに飼つた犬には、この間死なれてしまふしさ」などと、夢のやうな事をしやべり出すんだ。が、小犬は人懐つこいのか、啼きもしなければ噛みつきもしない。難鼻だけ鳴らしては、お蓮の手や頬を舐め廻すんだ。

「かうなると見てはゐられないから、牧野もとう／＼顔を出した。が、お蓮は何と云つても、金さんが此處へ來るまでは、決して家へは歸らないと云ふ。その内に縁日の事だから、すぐにまはりへは人だかりが出来る。中には「やあ、別嬪の氣違ひだ」と、大きな聲を出すやつさへあるんだ。しかし犬好きなお蓮には、久しぶりに犬を抱いたのが、少しは氣休めになつたんだらう。やゝ少時押し問答をした後、兎も角も牧野の云ふ通り一應は家へ歸る事に、や

つと話が片附いたんだ。が、愈々歸るとなつても、野次馬は容易に退くもんぢやない。お蓮も亦どうかすると、彌勒寺橋の方へ引つ返さうとする。それを宥めたり賺したりしながら、松井町の家へつれて來た時には、さすがに牧野も外套の下が、すつかり汗になつてゐたさうだ。……」

お蓮は家へ歸つて來ると、白い小犬を抱いたなり、二階の寢室へ上つて行つた。さうして眞暗な座敷の中へ、そつとこの憐れな動物を放した。犬は小さな尾を振りながら、嬉しさうに其處らを歩き廻つた。それは以前飼つてゐた時、彼女の寢臺から石疊の上へ、飛び出したのと同じ歩きぶりだつた。――

「おや、――」

座敷の暗いのを思ひ出したお蓮は、不思議さうにあたりを見廻した。すると何時か天井からは、火をともした瑠璃燈が一つ、彼女の眞上に吊下つてゐた。

「まあ、綺麗だ事。まるで昔に返つたやうだねえ。」

彼女は少時はうつとりと、燦びやかな燈火を眺めてゐた。が、やがてその光に、彼女自身の姿を見ると、悲しさうに二三度頭を振つた。

「私は昔の蕙蓮ぢやない。今はお蓮と云ふ日本人だもの。金さんも會ひに來ない筈だ。けれども金さんさへ來てくれれば、——」

ふと頭を擡げたお蓮は、もう一度驚きの聲を洩らした。見ると小犬のゐた所には、横になつた支那人が一人、四角な枕へ肘をのせながら、悠々と鴉片を燻らせてゐる！ 迫つた額、長い睫毛、それから左の目尻の黒子。——すべてが金に違ひなかつた。のみならず彼はお蓮を見ると、やはり煙管を啣へた儘、昔の通り涼しい眼に、ちらりと微笑を浮べたではないか？

「御覽、東京はもうあの通り、何處を見ても森ばかりだよ。」

成程二階の亞字欄の外には、見慣れない樹木が枝を張つた上に、刺繍の模様がありさうな鳥が、何羽も氣輕さうに囀つてゐる、——そんな景色を眺めながら、お蓮は懐しい金の側に、

一夜中恍惚と坐つてゐた。……

「それから一日か二日すると、お蓮——本名は孟蕙蓮は、もうこのK腦病院の患者の一人になつてゐたんだ。何でも日清戦争中は、威海衛の或妓館とかに、客を取つてゐた女ださうだが、——何、どんな女だつた？ 待ち給へ。此處に寫眞があるから。」

Kが見せた古寫眞には、寂しい支那服の女が一人、白犬と一しよに映つてゐた。

「この病院へ來た當座は、誰が何と云つた所が、決して支那服を脱がなかつたもんだ。おまけにその犬が側にゐないと、金さん金さんと喚き立てるぢやないか？ 考へれば牧野も可哀さうな男さ。蕙蓮を妾にしたと云つても、帝國軍人の片破れたるものが、戦争後すぐに敵國人を内地へつれこまうと云ふんだから、人知れない苦勞が多かつたらう。——え、金はどうした？ そんな事は尋くだけ野暮だよ。僕は犬が死んだのさへ、病氣かどうかと疑つてゐるんだ。」

附記

これは「影燈籠」以後の短篇集である。「杜子春」「アグニの神」の二篇は童話であるが、前例通り篇中に收める事にした。

この書の装幀は小澤忠兵衛、小穴隆一の兩氏を煩はした。どの位兩氏が私の爲に、面倒な工夫を重ねてくれたか、それは兩氏を知らぬ人には想像も出来ぬのに相違ない。私は兩氏の好意を思ふと、愈私の小説の拙さに、恥ぢ入らずにはゐられぬのである。

大正十年二月十六日

芥川龍之介



大正十年三月十一日印刷
大正十年三月十四日發行

(定價金貳圓五拾錢)

■夜來の花■

著者 芥川龍之介

發行者 佐藤義亮

東京市牛込區矢來町三番地

新潮社

電話番町 (長) 八八〇
九三九
六九九
番番番
振替東京 壹七四貳番

印刷所

東京市小石川區西江戶川町
電話(小石川)五九二番

印刷者 富士印刷株式會社
佐々木 俊一

芥川龍之介著作目錄

羅生門	新潮社版
傀儡師	同上
煙草と惡魔	同上
夜來の花	同上
影燈籠	春陽堂版
鼻	同上

人エ 3/4
-59

芥川氏の三著書

羅生門

第三版

大版最上製
二百八拾錢
壹圓五拾錢

目次

羅生門 ○鼻 ○父 ○猿 ○孤獨地獄 ○暹 ○手巾 ○尾形了齋覺之書 ○虱 ○酒蟲
○煙管 ○爺 ○忠義 ○芋粥

傀儡師

第五版

大版最上製
三百四拾錢
壹圓七拾錢

目次

奉教人の死 ○るしへる ○枯野抄 ○開化の殺人 ○蜘蛛の糸 ○嬰婆と盛遠 ○
或る日の大石内藏之助 ○首が落ちた話 ○毛利先生 ○戯作三昧 ○地獄

煙草と悪魔

第十一版

中版假製
六百二十錢
價五拾六錢

目次

煙草と悪魔 ○或日の大石内藏之助 ○野呂松人形 ○さまよへる猶太人 ○ひ
よつとこ ○二つの手紙 ○道祖問答 ○MENSURA ZOILI ○父 ○煙草 ○片戀

終